



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	レルヒによる日本初のスキー講習会に関する再検討：高田における明治44年度の第1回スキー講習会
Author(s)	中浦, 皓至
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 104, 213-247
Issue Date	2008-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.104.213
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32500
Type	departmental bulletin paper
File Information	P213-247.pdf



レルヒによる日本初のスキー講習会に関する再検討

—高田における明治44年度の第1回スキー講習会—

中 浦 皓 至*

A Study for Rewriting the History of the First Skiing School by Lerch in Takada

Koji NAKAURA

はじめに

第1章 先行研究の分析

- 第1節 「スキー術研究及意見」（第十三師団；1911年）
- 第2節 「日本に於ける當初のスキー」（鶴見 信；1931年）
- 第3節 その他の文献
 - （1） 山崎紫峰（昭和31年）
 - （2） 神田茂一（昭和47年）
 - （3） 瓜生卓造（昭和53年）
 - （4） 松下高信（平成元年）

第2章 原典文献に対する疑問と問題点

- 第1節 「研究概要」と「鶴見回想」の比較
 - （1） 専習将校について
 - （2） 第1日目（1月12日）
 - （3） 「メテレスキー」と「オテレスキー」
 - （4） 第2日目（1月14日）と第3日目（1月15日）
- 第2節 「実施表」と「鶴見回想」への疑問と問題点
 - （1） 「実施表」について
 - （2） 「鶴見回想」について

第3章 明治44年度の第1回高田スキー講習会

- 第1節 スキー講習会（3日目まで）
 - （1） 講習の開始まで
 - （2） 開始初日から3日目まで
- 第2節 4日目以降の講習会
- 第3節 教員の講習会とそれ以降

おわりに

注釈及び引用文献

- （資料1） 高田におけるスキー発祥に関する主要な文献
- （資料2） 高田のスキー発祥に関する文献引用系統図
- （資料3） 高田研究委員スキー演習実施表文献
- （資料4） 鶴見宜信の「日本に於ける當初のスキー」

* 北海道大学大学院教育学研究科健康スポーツ科学講座博士後期課程（体育計画〔体育史〕研究グループ）

はじめに

スキー文学者の瓜生卓造は、スキー史に関する多くの著作を持っているが、高田における日本で最初のスキー講習会について、

第58連隊のスキー専修将校14名が明治44年1月12日に第58連隊の営庭において190センチの巨漢レルヒの「メテレスキー」という大音声、「スキーを履け」という通訳の山口十八の号令が続いた¹⁾。

と記述し、これが日本のスキー発祥の定説であるとしている

このように、日本における近代スキーが、高田第十三師団歩兵第五十八連隊^{注1)}のスキー研究委員に対してレルヒの「メテレスキー」（スキーを履け）、「オテレスキー」（スキーを脱げ）という号令から始まったことは有名である。筆者の調査によれば、そのことが多くのスキー史に記述され、一般的な通説となっていると思われる（資料1）。しかし、その著作の多くは、引用文献が示されておらず、典拠がほとんど不明である。

そこで筆者は、時系列にならべて内容や表現の仕方からみて引用文献を推測し、その系統図を作成してみた（資料2）。多くの著者は、ひとつの史料だけで記述することは少ない。ここでは、もっとも重要視して引用していると思われるものを典拠文献とみなした。

これをみると、原典となったと思われる文献は、第十三師団から陸軍省へ提出した報告「スキー術研究及意見」²⁾（以下、これを「師団報告」と呼ぶ）と、鶴見宜信^{注2)}の記述した回想「日本に於ける当初のスキー」³⁾（以下「鶴見回想」と呼ぶ）であることが判る。ところが、「師団報告」と「鶴見回想」を読み比べると差異が多く、定説になっている「メテレスキー」や「オテレスキー」は、鶴見回想にしか記述されていない。この回想は、約20年前の回顧談であることからみて、若干事実と異なることは止むおえず、全体的な雰囲気を見る程度に活用しなければならないのかも知れない。しかし、「師団報告」が実際と異なって記述されていたとするならば、大問題である。だが、レルヒの日記（レルヒの会所蔵）や当時の「高田新聞」や「高田日報」など地元新聞と比較しながら見ていくと、「師団報告」にも記入もれや若干の誤りがあるのではないと思われる箇所がある。

そこで本稿の目的は、これら二つの原典資料を批判的に検討しながら問題点を明らかにしレルヒの日記と地元新聞で補いながら明治44（1911）年度における第十三師団歩兵第五十八連隊スキー研究会（事実上の講習会であったので以下、これを「講習会」と呼ぶ）の研究内容を中心に日本スキー発祥における第1回スキー講習会を再検討することである。

第1章 先行研究の分析

本稿のテーマに関して叙述されている主な先行研究文献を時系列に並べてみていくと（資料1）のようになり、引用された文献を推測して、系統図を作製（資料2）したことは既述した。ここでは、これらの文献を概観し、特徴点をまとめ、「師団報告」と「鶴見回想」の二文献が日本スキー発祥史の原典になっていることを検証してみたい。

第1節 「スキー術研究及意見」（第十三師団；1911年）

この文献は、東京偕行社によって『偕行社記事』第436号附録（明治45年1月5日）として発行され、さらに越信スキー倶楽部（会長；長岡外史第十三師団長）によって発刊された『スキー』（第1号；同年2月10日）⁴⁾に“日本に於ける「スキー」の経過”として掲載されていた。

『偕行社記事』第436号附録の最初に「本記ハ第十三師団司令部ヨリ寄稿セラレタルモノナリ」と記されている。つまり、第十三師団スキー研究委員がレルヒの指揮により1シーズン行ったスキー研究の結果報告であり、それは第十三師団参謀長渡邊小太郎が明治44（1911）年4月10日に第十三師団謀第八四号「スキー研究ニ関スル報告送附ノ件」（図1と資料3）として陸軍省副官竹島音次郎あてに送付した報告文書であった^{注3)}。

「師団報告」の目次をみると、（図2）の通りである。ここにある附録第二章“スキー研究経過ノ概要”の項に本稿のテーマである第十三師団スキー研究委員が、このシーズンに行ったスキー講習会の内容、すなわち「いつ、どこで、だれに、どのような内容で行われたか」が記述されている。

以下、「師団報告」に記載されている“スキー研究経過ノ概要”（以下、「経過概要」と呼ぶ）によって、①だれが、すなわち受講者の専習将校の名前、②いつからいつまで、開始日と期間、③講習を受けた場所やその講習種目などの内容について、順にみていきたい。

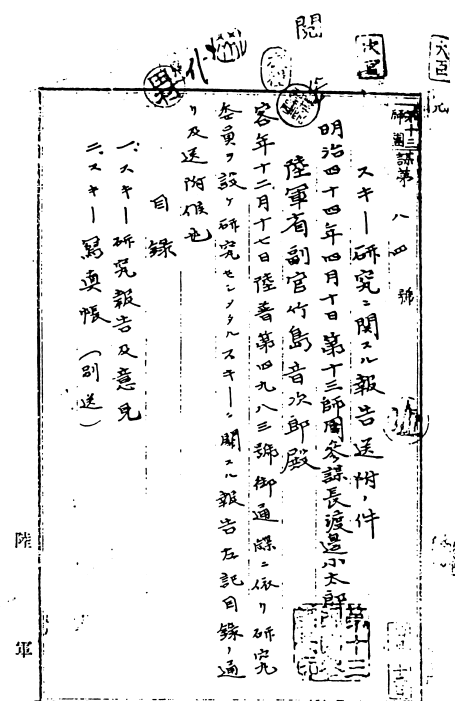


図1 「師団報告」（1911. 4. 10）

目次	
第一章	軍事上ノ用途
第二章	一般交通上ノ用途
第三章	体育上ノ利益
第四章	軍事上将来ニ関スル意見
附録	
第一章	スキー研究事項
第二章	スキー研究経過ノ概要
(別冊) スキー寫真帳	
スキー術研究及意見 ⁵⁾	

図2 「師団報告」の目次（1911. 4. 10）

「経過概要」から、まず①講習会の受講者は、（図3）のように歩兵第五十八連隊長・堀内文治郎大佐以下14名であったことが確認される。

長，歩兵第五十八連隊長 大佐堀内文治郎，第十三師団參謀 大尉山口十八，
專習將校 大尉鶴見宜信，中尉明石直人，同本間正文，同曾根田謙治，同網
倉孝之，同松元利彦，同高橋良，少尉高橋硝基，同坪倉眞次郎，同師橋渡，
少尉木暮廣三郎，同小山田昇 計十四名⁶⁾

(図3) 高田專習委員のメンバー (「師団報告」，1911)

これによれば，專習員は鶴見宜信大尉以下 12 名の將校で，堀内大佐と山口參謀は「列外ニ
在リテ常ニ該演習ニ参加セリ」となっていた。したがって，「高田スキー研究委員」（従っ
て受講者）は 14 名で，うち「專習將校は 12 名」であった，といういい方が正確な表現になる。
これを見ても判るように山口大尉以外の受講者は，歩兵五十八連隊の隊員であった。

つぎに，②開始日と期間，③場所とその内容については，「経過概要」の中にある“高田
研究委員スキー演習實施表”（以下「実施表」と呼ぶ）（図4において第4回から第32回は

一月十二日^{ママ}以来スキー傳習ノ状況左ノ如シ [筆者注；本文は縦書き]

高田研究委員スキー演習實施表					
回数	月 日	演 習 時	場 所 地 形	科 目	細 目
一	一月 十二日	午 後	營 内	基本演習	一 スキー構造ノ解説 二 スキー装着法及解脱、 三 スキーノ結束及解脱、 四 スキーノ携帯法、 五 不動の姿勢、 六 杖ノ保持法
二	十四日	全	練兵場附近平地	全	一 右（左）向、 二 右（左）ヨリ後向 三 後退 四 水平地ノ行進 五 各種隊形運動ニ関スル注意 六 横行
三	十五日	全	練兵場小起伏地	全	一 埋没シタル小流通過法 二 狭小ナル橋梁通過法 三 溝渠通過法 四 緩斜面登降法、 五 スキーニ附著スル雪ノ除去法 六 各種階段登降法
三三	十一日	全	妙 高 山	全	高山ニ於ケル一泊行軍（赤倉村宿営）
三四	十二日	全	全	全	全
實 働 二 十 四 日 半					
備考	三月十三日以後ハ積雪全ク融解シタルヲ以テ附近山間ノ局地ニ於テ時々復習ヲナスニ止メタリ				

(図4) 高田研究委員スキー演習実施表 (「師団報告」，1911)

資料3参照)に掲載されている⁷⁾。これによれば、②開始日は明治44(1911)年1月12日の午後、期間については同年3月12日まで、延べにして34日間で実質的(実働)日数は24日半(後に検討する)であった、と記述されている。

③場所と講習内容についても営内、練兵場付近平地、練兵場小起伏地、薬師山山地、大貫村付近山地、南葉山高山、関山中高山、米山高山、妙高山など技術のレベルに合わせて場所を変え、技術の向上とともに高い山に移っていったことになる。

この文献は、最初に山崎紫峰著『日本スキー発達史』(後述)に引用されたが、この山崎の著書を原典の如く扱われた著作は、資料2のフローチャートにあるように長尾惣助著「吾國軍用スキーについて」、木村毅著『日本スポーツ文化史』など数多く見ることができる。

第2節 「日本に於ける當初のスキー」(鶴見宜信; 1931年)

これは、第五十八連隊のスキー専習将校であった鶴見宜信が20年後に記述した回想記(資料4)であることは既述の通りである。この「鶴見回想」は、全日本スキー連盟の機関誌『スキー年鑑(第5号)』(1931年)³⁾に掲載されていた。

鶴見回想によれば、まず①専修将校については、つぎのように記されている

連隊長は左の諸氏を選出した。明石中尉、松元中尉、網倉少尉、本間少尉、高橋良中尉、高橋晴少尉、木暮少尉、小山田少尉、師橋少尉、坪倉少尉、右十名の外に山口十八大尉、菊池輜重兵大尉、桑厚騎兵中尉及予と都合十四名⁸⁾

(図5) 鶴見回想の研究委員のメンバー(「日本に於ける當初のスキー」, 1931)

これには、堀内連隊長が加わっておらず、菊池輜重兵大尉、桑厚騎兵中尉など、特科隊の将校2名が含まれている。

②開始日が1911(明治44)年1月10日朝8時とあり、期間については、

恰度一ヶ月間の教習を終へて、二月十一日の祭日を期して卒業試験を行ふ事となり、南葉山中腹の旭山頂上より練兵場迄約四基米の可なりの難コースを競走して降ることとなり試験を終つた。此れが即ち高田に於ける否日本に於けるスキー技術の傳習の嚆矢である⁹⁾。

とあるように、2月11日に卒業試験を行って終了したと、鶴見は記述している。この2月11日の卒業試験と期間1カ月説は、小川勝次著『日本スキー発達史』、中野理著『スキーの黎明』、同『スキーの誕生』、瓜生卓造著『スキー三国志』など多くの著作に引用されている。

最後に、③開始日の様子は、つぎのように述懐されている

[雨覆演習場にて]レルヒ少佐は予等一同の前に立つて一場の挨拶を述べ、直ちに「気を付けーメテレスキー」と号令せられた。専修員は如何にすべきや解せざるを以て、唯茫然として立つのみ。臨時通訳官は小首を傾け居たる後、稍々して「スキーをはけ」と複令した、専修員は此の号令を聞いても、如何にしてスキーを穿くべきかを知らず、唯互に顔を見合するのみ。予は此に於て山口大尉に注意して未だ

スキーの穿ち方を知らず、故に之より説明する様レルヒ少佐に伝えられんことを申出た。山口大尉尤もと言はん許りに之をレルヒ少佐に伝へたるに、氏は直ちにスキーのはき方を説明し、一々之を実際に自ら行ひて範を示した。而して予等の了解を確かめたる後、再び「メテレスキー」の号令を発した。⁸⁾

このようにしてスキーをはかせた後、レルヒは一人ずつ点検し「オテレスキー」と号令、スキーを脱いで結束し右側に立てて整列する。すると直ちにメテレスキーを発して十数回同じことを繰り返えし、「随分外国人の教へ方はくどいと思ひ乍ら」寒い雪の中で顔を真っ赤にして汗ダクになりながら一生懸命やった、と鶴見は回顧している。

この「鶴見回想」は、実際に体験した本人の記録であるということと、広範に配布された『スキー年鑑』に掲載されていたため、多くの研究者から注目され引用されることになった。例えば、1956（昭和31）年に小川勝次は『日本スキー発達史』を発行しているが、②開始日を「1月10日」から1月12日と修正した以外は、鶴見回想をそのまま引いている。翌1957（昭和32）年に中野理は『スキーの黎明』¹⁰⁾を上梓しているが、①専修将校も②開始日の1月10日朝8時も③「メテレスキー」も、鶴見回想をそのまま引用した。さらに、中野は7年後に『スキーの誕生』¹¹⁾を発刊したが、①、③はそのまま、小川の『日本スキー発達史』に倣って②開始日だけを「1月12日朝8時」に変更している。その後、瓜生卓造著『スキー三国志』¹²⁾や長岡忠一著『日本近代スキーの発祥と展開』¹³⁾は、この小川か中野の著作から引用（小川からなら孫引き、中野からなら曾孫）されている。なかでも、小川や中野の著述は、推測も交えてリアルなタッチで書かれていたため、その後のスキー史研究者から「原典」の如く扱われている。その結果、鶴見の「メテレスキー」「オテレスキー」が日本のスキー発祥史に定着していくことになったと思われる。

白田は、この「メテレスキー」説に対して生の史料から得られたものでなく

〔中野が〕彷彿とさせるタッチで描き出し発祥時の素晴らしさ、スキーの素晴らしさを格調高くうたい上げているが、この『物語』とともとれる信頼性が失われれば、これを根拠としたスキー史もぐらつかざるをえない。¹⁴⁾

と主張している

「メテレスキー」や「オテレスキー」が、実際にあったのかどうかについては、「鶴見回想」が情景描写としては有力な史料であるにとらえられている。「メテレ」という用語はフランス語であり（後述）、レルヒが当日、フランス語でスキー指導をしていたことは確からしいので、この言葉が指導の中で発せられたことは事実であろう。

小川や中野の「1月12日のメテレスキー・オテレスキー」説は、多くの文献（後述、図10参照）に引用されているが、他にも『神奈川県スキー連盟五十周年誌』（1988，p.29）、『兵庫県スキー連盟五十周年誌』（1984，p.96）、『長野県スキー史』（1978，p.11）など、全日本スキー連盟の多くの県連や市連スキー連盟記念誌のスキー史にも引かれている。

第3節 その他の文献

（1）山崎紫峰（昭和31年）

山崎紫峰は『日本スキー発達史』のなかで、

堀内委員長は更に歩兵隊より専習将校を選抜し、同少佐を教官として同月十三日より三月十二日まで、毎日一定の実施表に基き營庭、練兵場、舎内、薬師山（今の

金谷山) 射撃場, 南葉山, 關山演習場, 米山, 妙高山等段々實技程度を高めて猛訓練を積んだ結果, 一冬で大多數, 早くも實技大いに上達した¹⁵⁾。

と祖述している

このように, 山崎は, ①受講者の専習将校名は明記しておらず, ②開始日と期間については「同月十三日より三月十二日まで」, さらに③場所と講習内容なども営庭, 練兵場, 舍内, 薬師山, 射撃場, 南葉山, 関山演習場, 米山, 妙高山等と概括的にしか, 記述していない。

ここで注目されるのは, 開始日が「同[一]月十三日」としていることと「毎日一定の実施表に基き」と記されていることである。ここでの実施表とは, おそらく先にみた師団報告の「実施表」であると思われる。山崎は, 多くの史料を収集して, それらの文献名もかなり明示している。当然, 5年前に発表されていた「鶴見回想」も読んでいたと思われるが, なぜかそれには全く触れていない。誤りの多いことに気づいていたのであろうか。

ところで, 「実施表」には開始日が1月12日と明記されているので, 「同月十三日」は誤植による単純なミスではなかろうか, と考えられる。ところが, 『高田市史』(昭和33年)¹⁶⁾や瓜生卓造著『スキー風土記』(昭和53年)¹⁷⁾・さらに酒井繁著「日本のスキー発達に関する一考察」(昭和59年)¹⁸⁾などには, 開始日をそのまま「同月十三日」と引用されている。資料相互間の関連性の軽視によって作りあげられた誤った歴史認識の例である。

臼田は, この著作を原典(一次資料)的に扱い, 小川著『日本スキー発達史』を二次資料としているが, 既述のように山崎著『日本スキー発達史』は「実施表」を典拠とした二次資料である。従って, さらにそれから引いている小川の著作は第三次と考えられる。

以上のことから原典のように扱われている山崎の著作は, 引用図において系統的には「師団報告」に属すると考えられる(資料2参照)。

(2) 神田茂一(昭和47年)

大正時代に長らく高田日報の記者であった神田は, 『中央公論』(1972年2月号)¹⁹⁾に「スキー昔ばなし」を投稿し, スキー渡来のころを説明している。

まず, ①受講者の専修将校については, 明治43年12月(レルヒの来る前)に組織された13名をそのままあげ, ②開始日については, つぎのように記している。

少佐は明治四十四年(一九一一年)一月五日高田に着任した。その日, 五十八連隊の将校集会所で開かれた歴史的な歓迎会で, 堀内連隊長が仏語の歓迎の辞を読んだが, …(中略)…。専修員は演習のある火, 金両日を除き, 日曜も休まず週の五日をスキーと暮らす生活が始まる。歓迎会から一週間, 雪中演習場の雪のない土間で, スキーを着けたり脱いだりの指導が続く²⁰⁾。

期間については説明されておらず, ③講習の様子については,

通訳は山口参謀で「オッテレスキー」「メッテレスキー」「着けろ」「脱げ」のレルヒの号令で, スキーを着脱する²⁰⁾。

とある。この部分は, 神田が高田にくる前だったので, 「鶴見回想」からの引用であるが, この論文のほとんどは鶴見回想と関係のない記述内容であることから, 本論では独自の説とした(資料2参照)。

(3) 瓜生卓造(昭和53年)

瓜生は, 『スキー風土記』(1978年)の「高田」の項で, その発祥の様様について, 「諸家によってすでに述べ尽くされており, 私もし折にふれて書いてきたので, 屋上に屋を架す愚

はさけよう」と記したあと、

明治四十四年一月九日に、十三人の専修将校が高田五十八連隊の営庭で、レルヒの前に勢揃いして、はじめてスキーを履いた¹⁷⁾。

と簡単に記されている。どうして開始日が「明治四十四年一月九日」で、「十三人の専修将校」だったのか根拠が不明である。ここで瓜生は「私も折にふれて書いてきた」ということから、その文献を検索してみたが彼の著作の中に見つけることはできなかった。

例えば、有名な『スキー三国志』（1970年）をみると、

主任専修員、鶴見宜信大尉以下明石直人、松元利彦、高橋良の三中尉、本間正文、高橋晴基、網倉孝之、坪倉真次郎、木暮広三郎、小山田昇、師橋渡の七人の少尉、その他に、パンフレットの翻訳者である山口十八大尉、菊池、桑厚の両大尉がオブザーバーの形で参加した。明治四十四年一月十二日、午前八時、これら十四人の専修員たちは、雪の高田営庭に整列し、テオドール・エドレル・フォン・レルヒ少佐の到着を待った²¹⁾。

とある。この文は、「鶴見回想」から引用されていることがわかるが、日付や人数は先の内容と異なっている。

（4） 松下高信（平成元年）

松下は、「日本近代スキーの発祥における陸軍の役割について—高田師団を中心に満州出動まで—」（日本体育大学大学院修士論文）の中で、本論の講習会について、つぎのように記している。

1月12日午後1時、レルヒ少佐指導の下に、スキー専修員の講習会がはじまった。この講習会は、積雪がなくなる3月12日まで続けられており、この2ヶ月間に、半日、全日あわせて34回（延べ24日半）もの講習が行われている。〔中略〕2月11日の紀元節には、この基本演習の卒業試験をかねて、旭山の頂上から、約4kmの滑降競技が行われている²²⁾。

松下は、この論文をまとめる過程で、明治44（1911）年4月10日に第十三師団参謀長渡邊小太郎が陸軍省副官竹島音次郎宛に送付した文書（「師団報告」）を防衛研究所図書館で発見した（注2で既述）。これ以前の著作は、この文書からつくられていた『偕行社記事』または『スキー・第壱号』をみていたことから、それらのオリジナル文書を発見した松下の功績は大きい。「師団報告」と『偕行社記事』、『スキー・第壱号』を比較してみると、些細なこと（後述）を除いてオリジナル文書「師団報告」と同じであったが、それが確認されたことだけでも大きな意義がある。

上記の引用文をみると、前半部分はオリジナル文書に記述されたものであるが、後半部分の卒業試験は「鶴見回想」から引用している。「鶴見回想」に対する疑問は、既に述べた通りである。

【まとめ】以上の考察から、従来から明らかになっていた史料のなかで、「師団報告」と鶴見による約20年前の「鶴見回想」が、本論のテーマに対する原典文献であると確認してよいと思われる。従来から、原典的文書のように扱われていた山崎著『日本スキー発達史』は第二次であり、それから引用したと思われる小川著『日本スキー発達史』は第三次、さらに中野著『スキーの黎明』、『スキーの誕生』や瓜生著『スキー三国志』、『スキー風土記』

に至っては第三次もしくは、それ以上であったと見なすことができる（巻末資料2参照）。

第2章 原典文献に対する疑問と問題点

ここでは、まず原典文献とみられる「研究概要」と「鶴見回想」を比較検討して、相違点を明らかにする。つぎに、それぞれの文献についての疑問及び、筆者からみた問題点をあげながら、高田の地方新聞とレルヒの日記と照らし合わせ、総合的にみた講習会の実態に対する見解を述べてみたい。

第1節 「研究概要」と「鶴見回想」の比較

(1) 専習将校について

これについて二つの文献には、つぎの二点で相違がみられる。まず、①受講者の専習将校名（図6）を比較してみると、総数はともに「計十四名」で一致しているが、「研究概要」には堀内、曾根田、「鶴見回想」には菊池輻重兵大尉、桑厚〔原〕騎兵中尉がいる点が異なっている。

「研究概要」の研究委員	「鶴見回想」の専修委員
長、歩兵第五十八聯隊長大佐堀内文治郎、 第十三師團参謀大尉山口十八、 専習将校 大尉鶴見 ^{ママ} 宜信、中尉明石直人、 同本間正文、同曾根田謙治、同網倉孝之、同 松元利彦、同高橋良、少尉高橋碯基、同坪倉 眞次郎、同師橋渡、少尉木暮廣三郎、同小山 田昇 計十四名 ⁸⁾	明石中尉、松元中尉、網倉少尉、本間少尉、 高橋良中尉、高橋晴少尉、木暮少尉、小山田 少尉、師橋少尉、坪倉少尉、 右十名の外に山口十八大尉、菊池輻重兵大 尉、桑厚〔原〕騎兵中尉及予〔鶴見〕と都合 十四名 ⁹⁾ ※〔 〕内は筆者

図6 研究委員のメンバー比較

スキー研究委員が決定されるまでの経緯をみると、1910（明治43）年12月17日に陸軍省から「瑞典國軍隊用スキー實驗の件通牒」を受けた長岡師団長が「スキー」に関する研究の件命令を発し、つぎの8名によって最初の研究委員会が組織されていた。

委員長 堀内歩兵大佐、委員 山口歩兵大尉、同鶴見歩兵大尉、同明石歩兵中尉、
同小山田歩兵少尉、同堀野騎兵大尉、同前田砲兵大尉、同佐藤輻重兵大尉²³⁾

この委員会は、独力でスキー実習を始めるがスキーの操縦が意のままにならず、何等得るところなく騎兵、砲兵、輻重隊の各特科隊の委員が「スキー不必要」論を唱えたため、委員会から免除された。その直後にレルヒが高田に着任したが、改めてスキー指導を開始する際に、スキー不要論を主張していた特科隊員は除かれて、第五十八連隊の歩兵隊員のみで14名の委員が選ばれたのである。

この経過からみて、特科隊の菊池輻重兵大尉と桑原騎兵中尉が新メンバーに含まれていた可能性は低い。特科隊からも、オブザーバーとして講習会に参加した日があったことから、鶴見の記憶違いではないかと思われる。

つぎに、異なっている二つ目は、高橋少尉のファーストネームである。(図6)を見較べると、「研究概要」は「少尉高橋碯基」と記されているのに対して、「鶴見回想」では略記ながら「高橋晴少尉」とある。高橋少尉の名前については、巻末資料1にあげた文献で確認していくと「碯基」の他に、清基、晴基、磧基、碯基など、何の説明もなく図7のように引用者によって多種多様に表記されている。

この事例は、ほとんどの著者が引用に際して他の資料と比較することなく孫引きを続け、間違いを繰り返した端的な例である。しかし、これによって引用の系統図を作成する時に、何から引用したかが判明したので、本稿においては参考事項のひとつとして活用できた。

	文 献 名 (年 代 順)
高橋碯基	「師団報告」(明治44年)、本論文
高橋清基	「スキー術研究及意見」(明治45年)、『スキー』(第1号;同年、p.47)、筆者修士論文(平成14年)、筆者論文「日本における近代スキーの受容」(平成18年)
高橋(晴) 少尉	「鶴見回想」(昭和6年)、木村毅「読売スポーツ」(同25年)、中野理『スキーの黎明』(同32年)、同『スキーの誕生』(同39年)、坂部護郎『はるかなるシュプール』(同51年)
高橋碯基	『スキー』(第1号;明治45年、p.55)、小川勝次『日本スキー発達史』(昭和31年)、瓜生卓造『スキー三国志』(同45年)、神田茂一「スキー昔ばなし」(同47年)、長谷川増吉「レルヒ少佐の一本杖スキー」(同59年)、レルヒの会『スキー発祥想い出のアルバム』(同63年)、臼田明「長野県におけるスキーの移入に関する考察」(同64年)
高橋磧基	『スキー』(第2号;大正2年)、長岡忠一『日本近代スキーの発祥と展開』(昭和49年)、長岡忠一『日本スキー事始め』(同64年)、松下高信修士論文(平成元年)
高橋碩基	『高田歩兵五十八聯隊』(昭和57年)

図7 少尉高橋研究委員は多種多様な名前

なお、この点においてオリジナル文書「師団報告」が「碯基」であったにも関わらず、「スキー術研究及意見」と『スキー』(第壱号)は、いずれも「清基」と記されていた。歩兵第五十八連隊将校名簿の存在が確認されない今日、どの名が正しいのか断定することはできない。一般的に転記されるときに誤記されることが多いという事実から、本稿ではオリジナル原典「師団報告」に記載されていた「碯基」を使用することにした。これは、(図7)をみてもわかるように、本論が高橋少尉に対して「高橋碯基」と表記する最初のものである。

(2) 第1日目(1月12日)

以降は、「師団報告」に含まれている高田研究委員スキー演習実施表(「実施表」と「鶴見回想」を比較していく。

「実施表」	「鶴見回想」
一月十二日 午後 営内 「細目」一 スキー構造ノ解説、二 スキー装着法 及解脱、三 スキーノ結束及解脱、四 スキーノ 携帯法、五 不動の姿勢、六 杖ノ保持法	[1月] 明十日 午前八時 雨覆演習場 スキーのはき方と脱し方「メテレスキー」と「オ テレスキー」を十数回繰り返し、其の他スキーの 手入法、格納法、構造の説明

図8 第1日目の日時、場所、講習内容の比較

これを見ると、まず開始日（第1日目）と、その開始時刻が異なっている。「実施表」では1月12日午後であるのに対して、「鶴見回想」では1月10日午前8時となっている。

開始日について「高田日報」は、前日も「明日は講話」ありと報じていたが

奥國参謀少佐レルヒ氏のスキー講話は昨日午後二時より歩兵第五十八聯連隊第一雪中演習場に於て行はれたるが、堀内研究委員長以下各スキー研究委員及輜重隊の研究者も参集、レルヒ氏は此日腰部以下の緊縮せる本國の演習服を着し、携行せるスキーに就き、其着帯の方法より、雪杖の操縦法及スキーの坂路通路、方向轉換、飛越下降等に就き約一時間に亘る講話あり、尚し少佐は實地乗用さる筈なりしも、昨日は細雨にて降雪面の濕潤せる爲滑走不便なるに依り取り止むる事なりたり²⁴⁾

と記述している。さらに、「高田新聞」をみると

歩兵第五十八聯隊に於ては？報の如く昨十二日午後一時より營内第一大隊雨覆連兵場に於てレルヒ少佐指導の下に穿櫓の實地教授を開始したるが堀内聯隊長、堀内、林の兩大隊長其他鶴見大尉を首め一同参集しレ少佐は穿櫓の穿き方、漕棒の使用方其他に就き一々佛語を以て詳細に説明する處ありたるが師団より來隊せる山口参謀

は之を邦譯し委員諸氏は説明に従て動作を爲し同二時半を以て終了せる…²⁵⁾

と報道されている。この二紙によって、1月12日の午後1時か2時か、いずれにしても午後であることは間違いなく、「実施表」の1月12日午後が正しいということになる。所要時間も1時間か1時間半くらいの比較的短時間であったと思われる。

場所は「実施表」には営内としか記されていないが、「鶴見回想」は雨覆演習場、新聞は歩兵第五十八連隊第一雪中演習場、営内第一大隊雨覆練兵場などと書れている。歩兵第五十八連隊は、第一大隊に属していたので、「歩兵第五十八連隊之図」（明治42年9月28日発行；図9）にある第一大隊雪中演習場（図9のマル内）を指しているようである。

つぎに、講習内容について鶴見は、初日の模様を「レルヒ少佐は予等一同の前に立つて一場の挨拶を述べ、直ちに「氣を付け—メテレスキー」と号令せられた」として十数回「メテレスキー」と「オテレスキー」を繰り返したと語っている。しかし、「高田日報」によれば「少佐は實地乗用さる筈なりしも、昨日は細雨にて降雪面の濕潤せる爲滑走不便なるに依り、約一時間に亘る講話」だけだったという。これが正しければ、鶴見のいう「メテレスキー」と「オテレスキー」は初日ではなく第2日目以降であったことになる。ところが、同じ報道でも「高田新聞」には「委員諸氏は説明に従て動作を為し」と記載されている。この「動作を為し」が果たして、鶴見のいう「メテレスキー」だったのか。

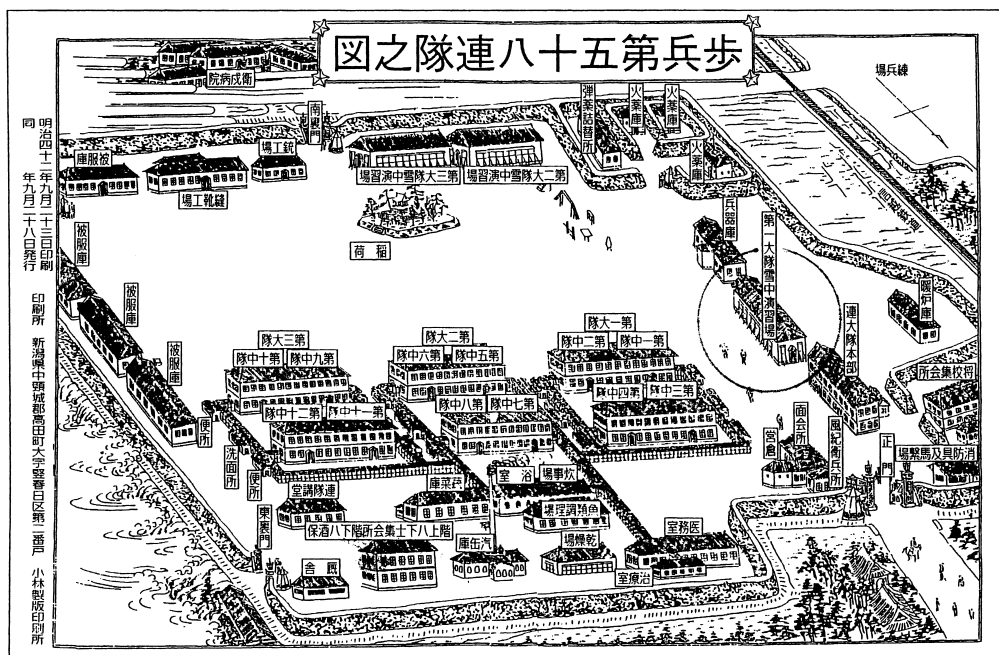


図9 明治42年9月28日発行「歩兵第五十八連隊之図」（上越市史近代通史編，2004）

先ず、「説明に従て動作を為し」とあるので、少なくとも鶴見がいうように説明もなく直ちに「メテレスキー」ではなかったことは確認できる。さらに、初日は短い所用時間であったうえ、最初の挨拶があり、それが鶴見がいう「一場の挨拶」であったとしても、レルヒがフランス語で挨拶し、それを山口が通訳したのであるから、普通の二倍以上の時間がかかるものと考えられる。従って（図8）の「実施表」の細目にある「スキー装着及解脫」も実技ではなく、説明だけだったと思われる。もし仮に「説明に従て動作を為し」たとしても、その場で簡単に要領を見せる程度であって、鶴見がいうように十数回におよび「外人の指導はくどい」と感じるほど「メテレスキー」と「オテレスキー」の練習を行うことは時間的にも不可能である。

この日のレルヒの日記には、「降雪から雨に、午後雪解けの陽気」と天候のことのみで講習会については記述されていない。

以上の考察から筆者は、つぎのように推測する。初日の所用時間は約一時間、長くて一時間半くらいであったこと、最初に通訳を通したレルヒの挨拶があったこと、天気は細雨であり第一大隊雪中演習場内であったことなどから考えて、「高田新聞」の「説明に従て動作を為し」たのは、鶴見のいう「メテレスキー」の動作ではなく、携帯法や不動の姿勢、杖の保持法など、簡単な実技をレルヒの説明に従って行っただけで、実質的には「高田日報」が報じているように「講話のみ」と、ほぼ同じ内容だったのではないかと考えられる。

なお、鶴見回想では「メテレスキー」と「オテレスキー」を十数回行ったことになっているが、そのためには第一回目の開始時間が8時でなければ、理屈にあわないと考えたとも推測される。

(3) 「メテレスキー」と「オテレスキー」

鶴見 信が記述した「メテレスキー」と「オテレスキー」は、(図 10) にみられるように多くの文献に引用されている。

- ①小川勝次著『日本スキー発達史』(pp. 3-4)、②中野理著『スキーの黎明』(pp. 40-50)、
- ③中野理著『スキーの誕生』(pp. 126-138)、④瓜生卓造著『スキー三国志』(pp. 13-17)、
- ⑤坂部護郎論文「スキー事始めと乃木将軍」『スキー発達史』, pp. 86-103)、
- ⑥小川勝次論文「日本スキー発達の年譜」『同上』, pp. 134-155)、
- ⑦伊黒正次論文「日本スキー史の中から」『同上』, pp. 356-359)、
- ⑧瓜生卓造著論文「スキーの裏方たち、高田」『スキー』Vol. 73-1、pp. 123-124)、
- ⑨長岡忠一著『日本近代スキーの発祥と展開』(pp. 46-52)、
- ⑩坂部護郎著『はるかなるシュプール』(pp. 21-31)、
- ⑪レルヒの会編『スキー発祥思い出のアルバム』(p. 16)、
- ⑫長岡忠一著『日本スキー事始め』(pp. 38-44)、
- ⑬臼田明論文「長野県におけるスキーの移入に関する考察」『信濃』41-10、pp. 787-788)、
- ⑭拙著『スキー技術の歴史と系統』(p. 13)、⑮拙著『日本スキー・もうひとつの源流』(pp. 36-38)、
- ⑯永野一郎著『一本杖スキー術 継承に関わる』(p. 51)

図 10 「メテレスキー」「オテレスキー」が引用されている文献(資料 1. 参照)

そもそも「メテレスキー」, 「オテレスキー」とは何か。これについて伊黒正次は論文「日本スキー史の中から」²⁶⁾ でメトレとはフランス語のメトル (mettre; metr) で「つける」, オテレとは同じくオテ (oter; ote) で「はずす」からきたという麻生武治の説を紹介し, 正確には「メテスキー」, 「オテスキー」と命令型でレルヒが号令をかけたが, 「メテレ」や「オテレ」に聞こえても, かえって明治調が出ていて実感があると記述している。

(4) 第2日目(1月14日)と第3日目(1月15日)

第2日目は, 初日から一日おいて1月14日だった。「高田日報」によれば,

昨日午後一時より中田練兵場五八林附近に於てレルヒ少佐指導の下にスキーの基本的乗用練習を爲したるが, レルヒ少佐は英語を以て熱心に指導し午後三時終了したり²⁷⁾,

であったということから, スキーの基本的乗用練習の最初に「スキー装着及解脱」を雪の上で行ったものと思われる。従って, 定説にもなっている鶴見の「メテレスキー」「オテレスキー」などスキーを履いたり脱いだりという実技は, 第2日目であったと考えられる

それは, 鶴見も別の所でレルヒは履いたり脱いだりを10度か15度も間違いのなくなるまでやって, つぎに平地行進で「メテネスキー」と云って一同にスキーをはかすと, 先づ歩いて見せた」というように, 連続して平地行進に進んだと述べていることから平地行進を行った日, すなわち第2日目であったことになる。樫野直一(レルヒの会)の初滑りの回想記は, この日の情景を述べたものであろう(後述)²⁸⁾。レルヒの日記では, この日について「晴れ, 寒い, よく晴れた陽光」と記されている。

「実施表」	「鶴見回想」
第二日 一月十四日 午後 練兵場附近平地 「細目」一 右（左）向、 二 右（左）ヨリ後向 三 後退、 四 水平地ノ行進、 五 各種隊形運動ニ関スル注意、 六 横行	第二日目は直に雪の上で「メテレスキー」をやって平地の行進法を説明された。而して自ら歩いて見せた。…要領さへ呑み込めば實に樂で愉快に滑り歩ける。一列側面縦隊になって行進し營庭の中央辺の凹んだ所（幅一間で深さ三尺）で一人残らず転倒した。
第三日 一月十五日 午後 練兵場小起伏地 「細目」一 埋没シタル小流通過法 二 狭小ナル橋梁通過法 三 溝渠通過法 四 緩斜面登降法、 五 スキーニ附著スル雪ノ除去法 六 各種階段登降法	第三日目は直に營庭から一列縦隊となり練兵場を指してレルヒ少佐が先頭で出て行つた。嚙て練兵場の中央に至ると登ることを教えると言って説明したが判らなかつた。自分に続けと金谷山にとりつき電光形登行を教え、百米の山頂に達した。そこから滑降を何度も繰り返しヘトヘトになって此の日の練習を終えた。

図 11 第 2 日目と第 3 日目の時間、場所、講習内容の比較

第 3 日目は、「実施表」によれば 1 月 15 日午後、練兵場小起伏地にて緩斜面登行法や階段登降法などを行ったことになっているが、「高田日報」には、

研究委員一同は基本的研究応用坂路滑走の爲午前十時連隊本部前に集合し、其れより薬師山に向ひ出発し坂路に於ける電光形登攀を試むべしと云う²⁷⁾、
と当日の朝に予告記事を書き、翌日には

午前十時堀内大佐以下スキー研究委員一同連隊本部前に集合、其れより薬師山附近に出場フォン、レルヒ少佐指導の下に坂路の登攀を爲した…²⁹⁾、
とある。この演習の様子は「鶴見回想」と同じだが、「実施表」では午後に練兵場小起伏地で練習したことになる。さらに同表には「緩斜面登降法、各種階段登降法」としか記述されていないが、登った後には滑降が行われるはずである。この点では、「電光形登行を教え、百米の山頂に達した。そこから滑降を何度も繰り返しヘトヘトになって此の日の練習を終えた」という「鶴見回想」の方が自然である。なお、この日のレルヒの日記には「午前、よく晴れた陽光、晴れ」と午前の天気が記載され、午前中にも講習会が実施したことを窺わせる書き方である。

以上の考察から筆者は、「鶴見回想」のかの有名な「メテレスキー、オテレスキー」は、第 2 日目の 1 月 14 日であり、鶴見がいうように十数回も行う時間がなかったので、せいぜい 5～6 回くらいであったという方が現実的であると考え。第 3 日目（1 月 15 日）の開始時間は「実施表」に記入されている「午後」ではなく、午前中から全日の講習であり、演習場所は、「実施表」の「練兵場小起伏地」ではなく金谷山、さらに練習内容についても「実施表」にある「緩斜面登降法」を中心に、ヘトヘトになるまで何度も繰り返して練習したのである。

第2節 「実施表」と「鶴見回想」への疑問と問題点

(1) 「実施表」について

①第3日目（1月15日）

既に見たように、午後練兵場小起伏地で「埋没シタル小流通過法、狭小ナル橋梁通過法、溝渠通過法、緩斜面登降法、スキーニ附著スル雪ノ除去法、各種階段登降法」という基本演習を行ったことになっているが、当日の「高田日報」は「午前十時連隊本部前に集合し、それより薬師山に向かい出発し坂路に於ける電光形登攀を試むべし」とし、翌日付けでは「昨日午前十時堀内大佐以下スキー研究委員一同連隊本部前に集合、それより薬師山付近に出場フォン・レルヒ少佐指導の下に坂路の登攀を為し」とあり、同日の別の記事に「堀内連隊長と一緒にスキーの坂路登攀研究として練兵場近くのマウント金谷に行きましたが天気は好しスキーの滑走が思う通りになるので非常に愉快でした」と報じている。

このことから、開始時間も午後ではなく午前10時から、場所も練兵場小起伏地でなく薬師山（金谷山）、練習種目も各種階段登降法などだけではなく、初めての滑降も行っていた。

②第13日目（2月2日）

午後射撃場附近山地で演習したことになるが、「高田日報」によれば、薬師山の3回目の2日は「城山急坂に於いてスキーイングを為したり斯くの如くに研究の歩を進め」³⁰⁾ していると報じている。つまりこの日は、薬師山のかなり急坂で演習していたことになる。

③第18日目（2月10日）

午後、射撃場附近山地で演習したことになるが、「高田日報」によれば、山根第八師団長が森川旅団長、伊藤副官とともに1時から2時半まで「スキー研究委員が營庭で行っている滑行と火薬庫堤防に於ける滑降を視察した」³¹⁾ と報じている。

④第26日目（2月22日）

関山中高山にて終日、山地行軍を行ったとなっているが、2月23日付け「高田日報」によれば「歩兵第五十八聯隊スキー研究委員一同は来る廿六日スキー遠乗会を國境田口から滑走して關山までの予定なり」³²⁾ と報じていた。もし、2月22日に実際に関山行が決行されているとすれば、当然その結果報告が報じられているはずであるから、26日に行くという予告記事しか記載されていないのは不自然である。従ってこの日、実際には関山に行かなかったのではないと思われる。

⑤3月3日

「三月三日午後一時より小学校長百五名が金谷山に於いて歩兵第五十八聯隊のスキー研究委員に就きスキーの見学を為す」³³⁾ とあるが、「実施表」にはこの日練習したことになるしていない。

⑥3月5日と3月7日

「歩兵第五十八聯隊のスキー研究委員一行は明後火曜日を以て米山登攀の壮挙する由なる…尚今日曜日には同午前八時聯隊本部前集合愈々踏査したる道順に依り山頂に攀じ當初の目的を達する筈なりと云ふ」³⁴⁾ と報じらていることから、スキー研究委員は3月5日と7日にも演習していることになる。なぜ「実施表」に記されていないのか。

⑦「実施表」によれば、研究委員のスキー演習は第34日目（3月12日）に前日から妙高山に「高山ニ於ケル一泊行軍（赤倉村宿営）」して終了したことになるっており、最後に「實働二十四日半」と記されている（図4、資料3）。しかし、同表を集計していくと「終日」

が18日間、「午後」だけが16日間あり、午後は半日、つまり0.5日として計算すると、

$$18日 + 16日 \times 0.5 = 26日$$

が実働日数となる。既述のように第3日目は「午後」だけではなく「終日」だったので、半日分増えることになるが、これについては後にあらためて検証する。

(2) 「鶴見回想」について

① 2月11日の卒業試験

鶴見は、つぎのように回想している。

恰度一ヶ月間の 習を終へて二月十一日の祭日を期して卒業試験を行ふ事となり、南葉山中腹の旭山頂上より練兵場迄約四基米の可なりの難コースを競走して降ることゝなり試験を終つた。此れが即ち高田に於ける否な日本に於けるスキー技術の傳修の嚆矢である⁹⁾。

さらに鶴見は、その10年後に発行された山岳雑誌『山と溪谷』にも

一箇月目にレルヒは「今日は卒業試験を行ふ、旭山の頂から練兵場まで滑つてころんだら落第にする」と云ひ渡した。旭山は頂上から少し下つた所に悪場があり、途中に七曲りがあるので、この二箇所が難関であつた。今日は師團長もゴールに見えて參觀されるので一同一生懸命であつた³⁵⁾。

と卒業試験が実施されたことを述べている

しかし「実施表」をみると、当日はスキーをしておらず（これも休日に不自然だが）、連日のように報道していた「高田日報」や「高田新聞」にも卒業試験については、まったく報じられていない。

これについて木下秀明は「鶴見回想 [卒業試験について；筆者注] は、明治44年と45年とを混同した事実誤認の産物と考えられる」^{注4)}と結論づけている。①それまで一度も登ったことのない旭山（朝日山）で、いきなり卒業試験を行うのは無理である、②翌45年の2月11日に越信スキー倶楽部発会式があり、競技会が南葉山で開かれている。この時には、長岡師団長が観戦のためゴールに来ていたことなどから、筆者も木下説と同じ見解である。

② 講習終了日すなわち講習期間

このように2月11日に終了試験が実施されなかったとすれば、鶴見がいう「講習期間は1カ月」は誤りで、「実施表」に記された3月12日が終了日となり、講習期間は2カ月とするのが正しい。

先行研究をみると、2月11日に卒業試験が行われ講習期間は1カ月としている文献には、小川勝次著『日本スキー発達史』（1956）、中野理著『スキーの黎明』（1957）、同『スキーの誕生』（1964）などあり、これらを原典のように考えて引いた著作に多くみられる。

一方、長岡忠一は、卒業試験は行われたとしたうえで「講習期間は3月12日とし、2月11日の試験前を前半、それ以降を後半」（以下、これを「長岡説」と呼ぶ）³⁶⁾という鶴見回想と「実施表」の折衷案を発表した。長岡説は、2月11日に卒業試験が行われなかったということに自信がもてない研究者にとって受け入れやすい説であったためか、松下高信著「日本近代スキーの発祥における陸軍の役割について」（体育学修士論文；1988）、竹腰誠著「学校におけるスキーの普及過程」（体育学修士論文；1991）などに引かれていた。同様に、拙著『日本スキー・もうひとつの源流』（1999）、同「北海道における近代スキーの発達に関

する歴史的研究所」（教育学修士論文；2002）などにも引用していたが、これらは2月11日に卒業試験が行われたということを前提にした間違った歴史認識であり、改められなければならない。

③民間人の講習会

此處〔2月11日の傳習終了後〕に於いて堀内聯隊長は直ちに之を地方一般に習せしめんとして講習会を催した處會する者十餘名、金井勝三郎、高橋進、阿部正量等諸氏も此の時の講習員である⁹⁾。

と鶴見は追懐しているが、これは誤りである。その根拠の第一は、2月15日から開始された県立中学校教員の講習会は、学校の教師が対象であり、参加者名簿に金井勝三郎や高橋進、阿部正量^{注5)}らは含まれていない。金井と高橋が受けた講習会は、翌45年1月5日から開かれた組織的な講習会であるが、阿部正量はこれにも参加していない。第二に、民間人への指導は「2月11日の傳習終了後」ではなく、すでに1月30日には開始されていた。

【まとめ】以上の考察の結果、原典として扱われている「実施表」と「鶴見回想」のいずれにも疑問があり、事実誤認がみられる。このことは、これらを使って歴史を再現するときに、どちらの史料もそのまま鵜呑みせずに、用心深く検証しながら使用する必要があることを示している。「鶴見回想」については、かなり早期から誤記の多いことが判っていたため、従来スキー史研究者は適宜、「師団報告」によって修正しながら歴史を記述してきた。しかし、「実施表」について、この種の指摘は本論が最初である。

第3章 明治44年度の第1回高田スキー講習会

これまでの論考をもとに、二つの原典「師団報告」、「鶴見回想」の相違点や誤記を考慮しながら、「高田日報」や「高田新聞」、さらにレルヒの日記をもちいて日本のスキー発祥であった明治44（1911）年1月から始まった歩兵五十八連隊のスキー研究会、すなわちレルヒによる第1回スキー講習会の実態をできるだけ詳細にみていきたい。

第1節 スキー講習会（3日目まで）

（1）講習の開始まで

明治43（1910）年12月17日 第十三師団参謀長渡邊小太郎が陸軍省副官竹島音次郎から「瑞典國軍隊用スキー實驗の件通牒」を受けた。堀内大佐は、ただちに月岡鍛冶屋と横山大工をよびつけ、陸軍省から送られてきていたスキーをみせ「これと同じものを29日までにつくれ」と命じた^{注6)}。

同年12月27日 第十三師団長岡外史が、「スキー」に関する研究の件命令を発した。

同年12月29日 長岡師団長は、つぎの8名を研究委員（第一次）に任命した。月岡らのスキーが届き、先に送られてきていたスキー2台も使って堀内大佐を先頭に実習を開始した。

委員長 堀内歩兵大佐、委員 山口歩兵大尉、同鶴見歩兵大尉、同明石歩兵中尉、同小山田歩兵少尉、同堀野騎兵大尉、同前田砲兵大尉、同佐藤輜重兵大尉²³⁾

明治44（1911）年1月4日 委員会は独力でスキーの実習を開始したが、スキーの操縦が意のままにならなかった。何等得るところ無く騎兵、砲兵、輜重隊の各特科隊の委員が、「ス

キーは不必要である」と唱えたため、堀内委員長は特科隊3名を委員から免除した。

同年1月5日 レルヒは高田第十三師団に着任し、翌日歩兵五十八連隊に出頭、連隊長室で伺候式がおこなわれた³⁷⁾。1月8日夕刻、レルヒが東京砲兵工廠で作らせたスキー10台が、高田駅に到着したという知らせをうけ、鶴見大佐が兵卒をつれて引き取ってきた⁸⁾。

同年1月9日 鶴見大尉が堀内連隊長に同連隊からスキー専習員を出して欲しいと要請し研究委員（第二次）14名がつぎのように選出された

委員長、歩兵第五十八連隊長 大佐堀内文治郎、第十三師団参謀 大尉山口十八、専習将校 大尉鶴見 信、中尉明石直人、同本間正文、同曾根田謙治、同網倉孝之、同松元利彦、同高橋良、少尉高橋石青基、同坪倉眞次郎、同師橋渡、少尉木暮廣三郎、同小山田昇 計十四名⁶⁾

（2） 開始初日から3日目まで

以下、講習会の様子を可能な限り詳細にみていくことにする。日付の行にある【 】の括弧内はレルヒの日記からの転載である。

明治44（1911）年1月12日（第1日目；木曜日）午後1時【降雪から雨、午後雪解けの陽気】

この日は、細雨だったのでレルヒによるスキー術指導は第一大隊雪中演習場で始まった。レルヒはフランス語で挨拶し、山口大尉が通訳した。続いてレルヒは、スキー構造の解説、スキー装着法及び解脱、スキーの結束及び解脱、スキーの携帯法、不動の姿勢、杖ノ保持法などについて講義したが、結束や解脱、携帯法や不動の姿勢、杖の持ち方など簡単な動作は、実際に説明にしたがって行わせた。歴史的な第一日目は、このように1時間半ほどの「講演」的な内容で終了した。

同年1月14日（第2日目；土曜日）午後1時【晴れ、寒い、よく晴れた陽光】

営庭に集合し、スキーの装着と解脱から開始された。有名な「メトレスキー」「オテレスキー」である。これをくどいように5、6回繰り返し、右（左）向け、右（左）より後向、後退などを練習してから平地行進に移った。その時の状況を窓からみていた樫野直一は、

レルヒ少佐は極めて軽快に将校集会所前より連隊本部前までの百メートルを四、五分で往復した。これが我が国におけるスキーの初滑りであろう²⁸⁾

と述べている

また、「高田日報」は

中田練兵場五八林附近に於てレルヒ少佐指導の下にスキーの基本的乗用練習を為したるが、レルヒ少佐は英語を以て熱心に指導し午後三時終了したり、²⁷⁾

と書いている

同年1月15日（第3日目；日曜日）午前10時 【午前、よく晴れた陽光、晴】

「高田日報」が「午前十時堀内大佐以下スキー研究委員一同連隊本部前に集合、其れより薬師山附近に出場フォン、レルヒ少佐指導の下に坂路の登攀を為した…」²⁹⁾と報じているように、この日は、練兵場付近で埋没している小流通過法、狭小な橋梁通過法、溝渠通過法などの基本技術の演習をした後に、緩斜面を電光形に登降する方法を練習した。初めて金谷山に登り、初めて本格的な滑降法を練習した。その時の様子は「鶴見回想」によれば、概ねつぎのようであった。

初めての電光形登行で汗だくでようやく百メートルばかりの金谷山の頂上に達したときレルヒ少佐は「斜面を滑って降りる事を教える」といって自ら模範を示した。百メートルもある斜面を一瀉千里の勢いで一直線に滑降した。鶴見の命令で木暮少尉から滑り始めたが二間も行かないうちに転倒、つぎつぎに滑り出した隊員が雪の中に頭を突っ込み、惨憺たる光景になった。ようやく下までいくと、レルヒ少佐はまた一同を上を集めては滑降させ、それを繰り返したのでヘトヘトになってその日の練習を終えた³⁸⁾。なお、レルヒの日記には「午前中よく晴れた」というように午前中も練習したように書かれていることから、「実施表」の「午後、練兵場小起伏地」で練習とあるが、これは誤りではないかと考えられる。

第2節 4日目以降の講習会

同年1月16日(第4日目；月曜日) 【スキーと装備の使用、講習なし】

午後1時から2時30分まで被服装具について、スキー兵の任務及び用途について、スキー隊教育法について学科の説明を行った。いわゆる「座学」であるが、レルヒの日記には「講習なし」と記されている。レルヒは座学を講習に入れていなかったようである。

同年1月17日(第5日目；火曜日) 【午前3℃、降雪、曇り】

午後、練兵場付近の小さな起伏地で、緩斜面の滑降法、転倒した時の起立法などを練習した。

同年1月19日(第6日目；木曜日) 【午前曇り、午後曇り】

薬師山で終日、急斜面の登行法及び斜面にある樹叢間の登行法、部隊の嚮導注意事項、斜面登行中逆行滑走の防止法、斜面滑降の遽止法、野外における休憩法などを練習した。

同年1月20、22日(第7、8日目；金～日曜日) 【スキー演習なし】

両日ともレルヒは「スキーの講習なし」と日記に書いているので、いずれも参加していない。従って、講習生たちが薬師山で午後、これまでに練習していた技術を復習した。

同年1月23日(第9日目；月曜日) 【記載なし】

午後1時に堀内大佐ら研究委員は、大吹雪について金谷山麓にスキー行軍を実施した³⁹⁾。この日、「実施表」では講習会を実施したことになっていない。

同年1月24日(第10日目；火曜日) 【すばらしい晴れ、-5℃寒い】

この頃から「穿櫓使用法」(「高田新聞」1/25, 1/26, 1/27, 1/29, 1/30, 2/1の6回)、「雪滑はかくして研究すべし」(「高田日報」1/26, 1/27, 1/28, 1/29, 1/30の5回)などスキーの使用法が連載されるなど、新聞による宣伝が盛んになった。「高田日報」には中田練兵場における研修委員の写真が初めて掲載された(図12)。同紙はスキーについて「多くの者が学ぶべきである」とスキーを奨励したあと、この写真について、つぎのように説明している。

圖は雪滑研究委員が萬望白皚の中田練兵場に整列して、號令一下、將に滑走を試みんとする景、先登の巨人はレルヒ少佐にして全氏左方に在りて莞爾たるは全委員長堀内大佐也⁴⁰⁾



図12 中田練兵場に整列したスキー研究委員（高田日報，明治44年1月25日付け）

同年1月28日（第12日目；土曜日） 【午前曇，午後曇，雪と雨】

1月28日1時半より師団各団隊長，すなわち長岡師団長，摺澤，森川両旅団長，蟻川，野澤，伊藤三歩兵連隊長，飛松，久米，中山，口羽の各特科隊長が，第五十八連隊将校集会場にて，レルヒ少佐からスキーの背負い袋について説明を受け，その後堀内連隊長からスキー研究についての講演を聞き，2時半から営庭でスキー研究員の演習を視察した⁴¹⁾。

同年1月30日（第13日目；月曜日） 【午前陽光寒い，午後陽光寒い】

この日は後明天皇祭のため休日であったため，前日と当日の新聞に，1月30日午前9時から午後3時まで第五十八連隊のスキー研究委員が金谷山に登攀するので各学校生徒及び一般人の来観を歓迎する⁴²⁾，と呼びかけていた。

スキー販賣開始 陸軍用ノ製作ニテ 小供用 参 大人用 四圓 但シ革附屬付 雪滑説明書有リ并 靴製造 高田茶町 調 革 山善靴店 電話 二四九番	穿櫛製造販賣 穿櫛使用ノ普及ヲ圖リ特ニ軍隊納 入ト同一價格ヲ以テ一錠ノ御注文 ニ應ズ 陸軍 練習具 射撃諸材料 高田横春 製造販賣 大槻三治 電話 二六番
---	---

図13 新聞に掲載されたスキーの製造販売宣伝（高田新聞，明治44年2月2日付け）

当日は午前中、平地の歩行や方向変換は何の面倒もなく行えたが、斜面の登行や滑降の練習では、日も浅く転倒者が続出した。さすがにレルヒは、危険な急峻の氷上を巧妙に滑走し、その上手さに見物人は、舌を巻いたという。午後と同じ練習と滑走中の急停止技術を5時頃まで練習した。この日、高田中学体操科教員もスキー研究委員の指導を受け、初めて練習に加わったが、さすがに失敗が多かった。見物人は、学生、その他頗る多く実地にスキー運動をみて、この地の運動としてその価値が認められ始めるようになっていきつつあった。これについて鶴見大尉は「各学校にても練習、研究の気運が生まれてきていることは悦ばしい、ぜひともこれを発展させたい」⁴³⁾と語っている。

すでにこの頃、地元の山善靴店や大槻三治らがスキーを製作し、3～4円で販売していた(図13)。

同年2月2日(第14日目;木曜日) 【記載なし】

薬師山の3回目の本日は、さらに奥にある城山の急坂においてスキーイングを行った。なお、中学、師範、農学校の体操教師は、前回に引き続いてスキー研究委員の指導を受けて練習した³⁰⁾。なお、レルヒの日記によれば、2日と翌3日の講習に参加していない。

同年2月5日(第17日目;日曜日) 【陽光、午前】

午前9時、営庭にスキー研究員と中学、師範、高女の諸教諭、少年たち、新聞記者らが一列に並んで薬師山に向かって出発した。線路を越え、練兵場を横切って薬師如来を横目にみながら頂上をめざす。スキー研究員は、さらに奥の斜面に行き、滑走を繰り返した。スキーに熱中する学生や青年、50歳を越えた老人も含めて多くのスキーヤーが参集していた。午後は、堀内連隊長が中学校体操科教員3名、農学校2名、女学校2名を含んだ多くの人々を指導した。このようにスキーの見学者と乗用者は、日ごとに増加していく傾向がみられた⁴⁴⁾。

なお、この日レルヒは勢子を従えて兎狩りにむかったという

同年2月7日(第18日目;火曜日) 【陽光、午前】

「高田師団のスキー研究は其後着々成功せるが昨七日引続き歩兵五十八連隊に於いて専修員一同にて研究されし」⁴⁵⁾

同年2月10日(第19日目;金曜日) 【陽光、寒い】

午後1時、営庭の滑行と火薬庫堤防で滑降練習を実施、第八師団長の山根中将が午後2時半までスキー研究員の練習を視察した³¹⁾。

同年2月11日(第20日目;土曜日) 【記載なし】

「高田師団スキー研究委員長堀内大佐及び奥國参謀ホン、レルヒ少佐以下歩兵五十八連隊の全専修員一同は今十一日午前八時全連隊営庭に集合の上南葉山に向つて長途行軍の壮挙を催ふすべしと」⁴⁶⁾。これは当日朝の予告記事であるが、この日は祭日であったことから、実際に行われたと考えられる。なお、鶴見回想の卒業試験は行われていない。

同年2月12日(第21日目;日曜日) 【嵐のような雪】

午前8時、堀内大佐、レルヒ少佐、鶴見大尉以下一行は、連隊本部前に集合した。以下、「高田日報」によれば「霏々と降る雪を衝いて南葉山に向つて出発したるが頂上より滑降の壮挙は本月下旬に於て行ふべく今回は登山口の探検に赴きたるなりと」⁴⁷⁾と極簡単にしか報じていないが、「高田新聞」は南葉登山の様子を、つぎのように詳しく書いている。

堀内以下12名のスキー研究員は、午前9時に射撃場の東より発走し峰に添って登っていったが、進むにしたがいスキーに雪が付着し進行が困難になった。そのうえ隊員の履いていた

高田製のスキーが破損し、レルヒ少佐が修繕したりで、ようやく山頂近くまで登ったが、山間より吹き出す北風が激しく、降雪霏々として前進することが難しい。雪上に伏して晴れるのを待ったが寒風骨を刺し、耳も奪われそうになり2時頃に登頂を断念して帰途についた。吹雪がはげしく濛々として雪の斜面がみえないため、非常に危険であった。レルヒ少佐が先頭でようやく下山し、午後5時ころ帰隊した⁴⁸⁾。なお、レルヒは当日の天候を「嵐のような雪」と記録していた。

同年2月14日(第22日目；火曜日) 【雪どけの陽気、すばらしい晴れ、夕方雨】

午後、葉師山の山地で「滑降中方向変換法」の基本演習を実施した

第3節 教員の講習会とそれ以降

同年2月15日(水曜日；研究委員休み)

新潟県下25県立学校の体操科教員28名^{注7)}のスキー講習会は、長岡師団長の要請に新潟県の清棲知事が答えて実施されることになった。

午前9時研究員一同師範学校に集合し10時聯隊に着す、十時半講話開始、聯隊長はスキーと精神教育との関係に就きレルヒ少佐はスキー発達史及其使用上の注意(鶴見大尉譯)に就き各約一時間の講話あり、午後一時より木暮少尉指導の下に榮庭にて練習をなし午後四時半解散す⁴⁹⁾。

と新潟県のスキー研究委員であった高田中学校長田川辰一は、記述している

「高田日報」には、細雨のなか二区隊にわけて堀内大佐も熱心に指導、すでに練習していた高田中学や農学校、高等女学校の教師は補助官を努め、県スキー研究委員田川中学校長及び菊池農学校長、片山郡視学らも試乗したと報じられている⁵⁰⁾。

同年2月16日(第23日目；木曜日) 【降雪】

第2日目は雪、午前9時に営庭に集合し堀内大佐から諸般の注意があり、男子を3班(新潟方面を第1班、長岡方面を第2班、その他を第3班)に分けた。女子部は特別班として営庭にて練習し、男子部はレルヒ少佐と木暮少尉の指導の下、練兵場で平地歩行を練習した。午後0時半、スキー研究委員と共に金谷山の西南方の山坂にて4時半までレルヒ少佐の指導を受けた⁴⁹⁾。

同年2月17日(第24日目；金曜日) 【降雪】

第3日目は「終日風雪殊に甚し」という天候であった。午前9時、営庭に参集し堀内大佐、木暮少尉の指導で陸軍墓地裏山にて障害物の通過法、登攀、滑降を練習した。午後は金谷山にて登攀、滑走間転倒の処置、滑走中停止など4時まで演習するが「研究未だ日ならずして俊坂に向かい且つ風雪殊に甚しかりしを以て各員の疲労殊に甚だしきものありしが如し」⁴⁹⁾であった。なお、この日のスキー研究委員は、終日金谷山で滑降中方向変換法を練習した。

同年2月18日(第25日目；土曜日) 【9時～スキーだけ、スキー講習なし】

開始して4日目の学校教員の演習は、午前9時に営庭に参集し、レルヒ少佐、木暮少尉と共に金谷山にて行われた。ただし、レルヒの日記によると上記のように「9時～スキーだけ、スキー講習なし」と記載されていることから、自分でスキーを滑り、教員の指導は終日木暮少佐が行ったようである。この日は、雨雪であったが、午前は昨日の復習の他に雪少なき急斜面の通過法、稚樹林の通過法を、午後は平地の行進、滑走、斜面の登攀、滑降など諸動作について検閲があり、午後5時10分に終わった。なお、この日のスキー研究委員は、新たに

「小角度方向変換法」を練習、午後5時過ぎに帰隊した⁴⁹⁾。

同年2月19日(第26日目;日曜日) 【陽光と雪】

午前9時に営庭参集、金谷山にて練習した。教員には堀内連隊長、レルヒ少佐と木暮少佐が指導にあたり、正午から終了式が薬師寺境内で行われた。さらに、午後1時から同所で高田日報社の呼びかけで結成された「高田スキー倶楽部」の発会式があり、スキー研究委員も列席した。従って、「実施表」には終日練習したことになっているが、実質的には午後は練習できなかった。なお、これが日本で最初のスキークラブであったが、すでに結成式の前からクラブ員は、この日も午前中から付近で練習していた。「スキー倶楽部員数百名處狭までに居並びたり」⁵¹⁾と「高田日報」は報じている。

同年2月20日(月曜日;研究委員休み) (記載なし)

高田以外の各衛戍地將校を高田に召集して10日間^{注8)}スキー演習をさせ、堀内連隊長、レルヒ少佐らが指導した⁵²⁾。これで、松本歩兵第五十連隊以外はスキー技術が導入したことになる。参加將校は、以下の通りであった。

新発田歩兵第十六連隊 歩兵中尉小野順助、同少尉倉林公任

村松歩兵第十三連隊 歩兵少佐小野五郎、同中尉小林準⁵³⁾

小千谷工兵第十三大隊 工兵少尉坂野慶晴

同年2月21日(第27日目;火曜日)【12時30分～2時、全てのスキーの検査、スキー演習なし】

この日「実施表」では午後、薬師山山地で基本演習を行ったことになっているが、レルヒの日記には「12時30分～2時、全てのスキーの検査、スキー演習なし」とあることから、演習は実施されなかったと思われる。用具の点検も座学の一部とも考えられる。

同年2月22日(第28日目;水曜日) 【午前陽光、午後霧、寒い】

この日「実施表」では終日、関山中高山で山地行軍の応用演習を行ったことになっているレルヒの日記からも、その様であったことが窺える。

同年2月23～24日(第29～30日目;木、金曜日) 【スキー演習なし】

この両日「実施表」では、薬師山山地で基本演習を復習と記述されているが、レルヒは参加していないので、講習生だけで練習したものと思われる。

同年2月26日(第31日目;日曜日) 【曇、雨はなし】

午前9時、連隊前に集合して「雪崩多き高山登降法」の練習のため春日山に登攀した。予定では来日曜日に田口方面(汽車で田口駅で下車し国境を越えて黒姫山麓に登攀する)へ行くことになっていたが、研究委員に支障を生じる者がでたため変更した⁵⁴⁾。なお、「実施表」ではこの日、「米山高山」と記述されている。

先週結成された高田スキー倶楽部の第3回目の例会が薬師山であり

日曜毎にスキーが殖えて見物人も集まるので薬師山は講演の様な観がある。スキーが縦横無尽に駆け歩くので山は至る處踏み固められて何處でも通行できる、⁵⁵⁾ようになっていたという

同年2月28日(第32日目;月曜日) 【陽光、午前】

終日、薬師山山地で氷上滑降法、急斜面側方滑降法、変則滑降法などの基本演習を実施した

同年3月1日(第33日目;水曜日) 【すばらしい晴、南葉山に向かってスキーツアー】

「実施表」には「午後に射撃場付近山地にて」とあるが、上記の日記にあるように南葉山に向かってスキーツアーをしながら、軍装(下士卒)運動法、機関銃積載及運搬法、「スキー」

隊天幕露營法などの訓練を行った^{注9)}。

同年3月3日(第34日目;金曜日)

午後1時, スキー研究委員の演習風景を視察小学校長会議に出席した105名が見学した³³⁾と「高田日報」は報じている。この日の「実施表」では, 委員会の演習は開かれたことになっていない。予定では休みだったが, 学校長が105名も視察することになったため金谷山で練習したものと考えられる。

同年3月9日(第35日目;木曜日)【曇午後雨, 午前6時~午後5時までスキー兵器, 南葉山で】

上記の日誌にあるように南葉山において高山行軍の中で射撃や散兵の戦闘訓練など本格的な軍事スキーの活用法の他, 濃霧中の行進法, 雪崩に対する処置法などの訓練を行った^{注10)}。

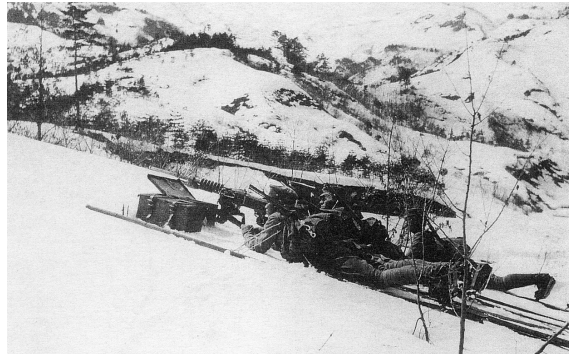


図 14

3月9日スキーを履いて射撃演習
(スキー発祥思い出アルバム, 1988)

同年3月11~12日(第36~7日目;土, 日曜日)【11日スキー演習なし, 12日陽光, 山にスキーツアー】

スキー研究委員は, 山口参謀を主唱に赤倉行きを決行した。11日に田口駅で下車し, 妙高のすそ野を登攀した。「実施表」には, 「高山における一泊行軍」と記載されている。レルヒは, 「11日スキー演習なし, 12日陽光, 山にスキーツアー」とあるので, 初日には参加せず2日目に合流したのか, 不明である。

なお「実施表」では, 12日が最後の演習であったとしているが, 3月16日に南葉山登攀を試み,

富士登攀の壮挙計画あるが右は来る廿六日頃高田を出発して向ふ五日間の予告を以て全地に向ひ吉田口より徐々に登攀して雪中種々なる乗法研究に努めたる末雪艇を柱となして天幕露營の快挙を試み帰途御殿場口より滑下り帰団すべき予定にて目下長岡師団長に許可申請中なりと, ⁵⁶⁾

とある。スキー研究委員による「富士登攀の壮挙」は許可が出ずに実施されなかった

仕方なくレルヒは、4月15、16日に同郷のクラッツアーとアタックしたが、九合目で引き返している⁵⁷⁾。

レルヒの日記によると、3月21日は素晴らしく晴れており、薬師山で今シーズン最後のスキー講習を行ったことになっている。しかし、「高田日報」によれば、3月26日にスキー研究委員は、金谷山の山奥でスキーを実施していた、と報じられている。この時、高田スキー倶楽部のメンバーも指導をうけて、シーズン最後のスキー練習を行ったという⁵⁸⁾。

高田スキー倶楽部は、このシーズンに第1回(2/11)、発会式(2/19)、第3回(3/5)、第4回(3/12)、第5回(3/19)と最後はこの日、第6回(3/26)に練習会を実施した。スキー研究委員の指導をうけて民間のスキーヤーは、目覚ましく増え、技術も向上した。特に、始まって以来一回も欠かさなかった金井勝三郎は、

面白うてモウ込も止められぬ、今度が最終のスキーとは情けない、是非此次には關山に行こう。スキーのお陰で体は何処を當つてもシッカリ肉が付いて気持ちがい⁵⁸⁾、と喜色満面であった

【まとめ】 このように見てくると、スキー講習会は実施表の合計26日に、1月15日と23日、3月3日でそれぞれ0.5日増え、2月11日で1日増えるので計2.5日プラスになる。一方、1月16日、2月19日と21日には0.5日分、合わせて1.5日減るので、差し引き1日増加する。従って、スキー講習会の実技は、1月12日から3月12日までの2カ月間に37日間で実働にして27日間、座学が2日で実働1日間という計算になる。レルヒの日記によれば、1月20日と22日、2月1日と3日、23日、24日、3月11日の7日間(実働5.5日間)は、レルヒが講習会に参加せず、講習生同士が自主トレをしたことになる。

おわりに

このように見てくると「鶴見回想」は、研修委員のメンバー、開始日が10日、第1日目の開始時間が8時、初日にレルヒは説明もせずに直ちに「メテレスキー」と号令したこと、「オテレスキー」と交互に十数回も繰り返させたこと、2月11日に卒業試験があったこと、研究(講習)は約1ヶ月で終了したことなど、多くの項目で事実と異なっていることが判る。20年間という時間が記憶を風化させたものであらうと思わざるを得ないが、この文献を典拠とてつくられた歴史認識は、全てあらためられなければならない。

つぎに「スキー術研究及意見」について臼田明は

そこに登場する人物は原簿と同等であり、真筆であった。したがってそこに記されている人物、地名、出来事、行動記録は確かに事実そのもので、粉飾もない文字通り一等史料というべき性格のものである¹⁴⁾。

と絶対的に信用しているが、これは臼田だけの特例ではない

本稿で論考したように「人物は原簿と同等」であることはその通りだと思われるが、「実施表」については出来事や行動記録に少なからず事実との相違がみられる。第19日目(2月12日)の「細目」の欄に「當日吹雪甚ダシ」と記入されているが、確かにこの日は吹雪であったことは間違いないことから、この表の中でここと最後の「三十四日、三月十二日」の二カ所だけが行動した後に記載されたとみなされる箇所である。

そこで筆者は、この表について最初に決められていた予定表を、「スキー」発刊まで時間がなかったのを、ほとんど手直しせず使用したのではないかと推測する。このように推論すると、先に見た新聞報道やレルヒの日記との食い違いも納得できる。

いずれにしても、この原典を使用するにあたって、資料相互間の関連性を軽視してはならないと考えられる。本稿の第3章は、これらを考慮しながらまとめたものである。特徴的なことは、まず1月12日から開始されたスキー講習会は、見学者やオブザーバーの参加も気軽に受け入れていたこと、第二にレルヒの「メテレスキー」「オテレスキー」の号令は、通説になっている初日の1月12日ではなく、第2日目の1月14日であったこと、第三にスキー講習会は、1月12日から3月12日までの2カ月間に37回、実働にして実技実習は27日間で座学が1日（半日ずつ2回）にわたって実施されたこと、第四にその期間中に、1月20日と22日、2月2日と3日、23日、24日、3月11日の7日間、実働にして5.5日間は、レルヒが参加せず、講習生同士で復習していたこと、第五に堀内や木暮などが他団体の指導（たとえば、1月30日から毎週日曜日は高田スキー倶楽部メンバーへの指導、2月15日からの県立学校教員講習、2月20日から高田以外の連隊将校研修会など）を講習会と並行して行っていた。

以上、本稿における考察の結果を日誌にまとめると、初年度の高田スキー講習会は、以下のようなになる。なお、右端の覧には「実施表」に記されていた講習の時間帯（上段）と、実際に実施された時間帯が異なっている日のみ下段にゴシック文字で記入した。

月 日	内 容 (最初のカッコ内は実施時間)	実施表
1月12日(木) 第1日目	(午後) 1時にレルヒの指導が開始された、第一大隊雪中演習場において不動の姿勢や杖の持ち方など簡単な動作のみ、定説になっている鶴見回想による「メテレスキー」は第2日目に行われた、初日は1時間半ほどの「講演」で終了した	午後△
1月14日(土) 第2日目	(午後) 1時に宮庭にて「メテレスキー」「オテレスキー」を繰り返し、右(左)向けや右(左)より後ろ向け、さらに平地行進の練習を行った	午後△
1月15日(日) 第3日目	(終日) 10時練兵場付近で小流通過法、狭小な橋梁通過法、溝渠通過法などの基本技術の演習後金谷山にて坂路の登攀(電光形)と初めて頂上へ滑降法を練習した	午後△ 終日○
1月16日(月) 第4日目	(実技なし) 1時から2時30分まで舎内で被服装具、スキー兵の任務及び用途、スキー隊教育法などについて学科の説明を行う、いわゆる「座学」	午後△ (座学)
1月17日(火) 第5日目	(午後) 練兵場付近の小さな起伏地において、緩斜面の滑降法、転倒した時の起立法などを練習した	午後△
1月19日(木) 第6日目	(終日) 薬師山で急斜面の登行法、斜面にある樹叢間の登行法、部隊の嚮導注意事項、斜面登行中逆行滑走の防止法、斜面滑降の遏止法、野外の休憩法など練習	終日○
1月20日(金) 第7日目	(午後) 薬師山でレルヒは参加せず、自分たちだけでそれまでに学んだ種目を復習した。	午後△
1月22日(日) 第8日目	(午後) 20日と同様に薬師山で自分たちだけで練習した。レルヒは参加していない	午後△
1月23日(月) 第9日目	(午後) 1時、堀内大佐ら研究委員は、大吹雪について金谷山麓にスキー行軍を実施した	なし 午後△
1月24日(火) 第10日目	(午後) 気温は-5℃と寒かったが、すばらしい晴天のもとで薬師山においてレルヒの指導により基本演習の練習をした	午後△

月 日	内 容 (最初のカッコ内は実施時間)	実施表
1月27日(金) 第11日目	(終日) 前回と違い曇りで雪解けの陽気であったが、レルヒも参加して薬師山で基本演習の練習をした	終日○
1月28日(土) 第12日目	(午後) 営内でレルヒからスキー研究の講演、基本演習の練習、師団各団隊長、両旅団長、連隊長、各特科隊長が2時半からスキー研究員を視察した	午後△
1月30日(月) 第13日目	(終日) 研究委員は金谷山に登攀や滑走中の急停止技術を練習、各学校生徒及び一般人が午前中平地の歩行や方向変換、午後は斜面の登行や滑降の練習	終日○
2月2日(木) 第14日目	(午後) 研究委員は金谷山(3回目)の城山急坂でスキーング演習、中学や師範、農学校の体操教師が、前回に引き続き指導を受けた、レルヒは参加せず	午後△
2月3日(金) 第15日目	(終日) レルヒは参加せず、従って研究委員だけで基本演習の復習を大貫村付近山地で行った	終日○
2月4日(土) 第16日目	(午後) 前日と同様にレルヒは参加せず、研究委員だけで基本演習を薬師山山地において行った	午後△
2月5日(日) 第17日目	(終日) 午前9時研究委員と中学、師範、高女の諸教諭、少年たち、新聞記者らが一列に並んで金谷山へ、研究委員はさらに奥の斜面に行き競滑走、午後は堀内連隊長が中学校体操科教師3名、農学校2名、女学校2名を指導した	終日○
2月7日(火) 第18日目	(午後) 「高田師団のスキー研究は其後着々成功せるが昨七日引続き歩兵58連隊に於いて専修員一同にて研究されし」(新潟新聞44.2.8)と報じられている	午後△
2月10日(金) 第19日目	(午後) 1時、研究委員が営庭で滑走、火薬庫堤防で滑降の練習を実施、第八師団長山根中将が午後2時半まで練習を視察した	午後△
2月11日(土) 第20日目 紀元節	(終日) 午前10時高田日報社の「高田スキー倶楽部」の発会式(2月19日)前に希望者が多いため練習会(第1回目)開始、「専修員は今十一日南葉山に向かって行軍した」と新潟新聞(44.2.12)鶴見回想による研究委員の卒業試験は翌年2月11日の競技会の記憶ちがいであった	終日○
2月12日(日) 第21日目	(終日) 午前8時堀内大佐、レルヒ少佐、鶴見大尉ら南葉山へ、山頂近くで吹雪が激しく午後2時頃に登頂を断念し5時頃帰隊した	終日○
2月14日(火) 第22日目	(午後) 薬師山の山地で「滑降中方向変換法」の基本演習を実施した。雪どけの陽気で素晴らしい晴天であったが夕方雨になった	午後△
2月15日(水) 講習会休	・新潟県立学校の体操科教員28名に対しレルヒ少佐の講話、午後1時より木暮少尉が4時半まで営庭で実技の指導を行った、これが組織的な最初の民間人(全部教員)へのスキー指導であった	
2月16日(木) 第23日目	(午後) 1時、研究委員は学校教員と共に金谷山の西南方の山坂にて4時半までレルヒ少佐の指導を受けた	午後△
2月17日(金) 第24日目	(終日) 研究委員は射撃場付近の山地で登攀、滑走間転倒の処置、滑走中停止など4時までレルヒ少佐の指導を受けた	終日○
2月18日(土) 第25日目	(終日) 午前9時、研究委員は開始して4日目の学校教員と共に金谷山にて練習レルヒと木暮が指導にあたり、研究委員は「小角度方向変換法」を練習した	終日○
2月19日(日) 第26日目	(午前) 午前9時、最終日をむかえた学校教員と共に研究委員は金谷山で練習、教員には堀内連隊長、レルヒと木暮が指導、正午から薬師寺境内で終了式、引き続き午後1時から高田スキー倶楽部の発会式が実施された	終日○ 午前△
2月20日(月) 講習会休	・高田以外の各衛戍地(松本を除く)将校5名に対し10日間、堀内連隊長やレルヒ少佐らが指導した	
2月21日(火) 第27日目	(実技なし) 12時30分から2時まで、レルヒの指導で全てのスキー検査を行った。従って、この日はスキーの演習は実施されなかった(「座学」の一部)	午後△ (座学)

月 日	内 容 (最初のカッコ内は実施時間)	実施表
2月22日(水) 第28日目	(終日) 関山中高山で山地行軍の応用演習を行った	終日○
2月23日(木) 第29日目	(終日) 午前中は陽光、午後は霧の寒い日であったが、薬師山山地でレルヒは参加せず講習生だけで基本演習を復習した	終日○
2月24日(金) 第30日目	(終日) 前日と同様にレルヒは参加せず、薬師山山地で講習生だけで基本演習を復習した	終日○
2月26日(日) 第31日目	(終日) 午前9時、研究委員は「雪崩多き高山登降法」の練習のため春日山に登攀、一方高田スキー倶楽部の第3回目の例会は金谷山で実施した	終日○
2月28日(火) 第32日目	(終日) 研究委員は薬師山山地で氷上滑降法、急斜面側方滑降法、変則滑降法などの基本演習を実施した	終日○
3月1日(水) 第33日目	(終日) 射撃場付近の山地で機関銃を補助スキーに載せて深雪の中を900メートル地点まで運搬、雪中天幕露営法など軍事スキー活用法の基本演習を実施した	終日○
3月3日(金) 第34日目	(午後) 1時、中頸城郡小学校長105名が学童冬季戸外運動のため研究委員の演習を金谷山で視察した	午後△ 終日○
3月9日(木) 第35日目	(終日) 南薬師山地で高山行軍の中で射撃や散兵の戦闘訓練など軍事スキー活用法、濃霧中の行進法、雪崩に対する処置法などの応用演習が実施された	終日○
3月11～12日 第36～37日	(終日) 高山における一泊行軍として山口参謀ら妙高へ、初日は田口駅で下車、妙高のすそ野を登攀した	終日○

図 15 明治 44 (1911) 年度の第 1 回高田スキー講習会日誌



図 16

(上) 第 1 回高田スキー講習会の
受講者

(下) 1 月下旬から町民が
スキー練習を見学に来た
(スキー発祥思い出アルバム, 1988)

謝

本稿は、平成 19 年度北海道体育学会研究大会（苫小牧；07．11．10）で発表した内容に補筆したものである。本稿の資料収集については、レルヒの会々長小堺昭一氏、同会幹事長加藤謙治氏の他に多くの方々の多大な支援を仰いだ。深く御礼申し上げる。

注釈及び引用文献

注 1） 高田第十三師団は、明治 40（1907）年 9 月に日露戦争後の軍備拡張政策として創設された。同師団には、歩兵第十五旅団と第二十六旅団の他に騎兵第十七連隊、野砲兵第十九連隊、工兵第十三大隊、輜重兵第十三大隊の四つの特科隊があった。歩兵第十五旅団司令部（新発田）には歩兵第十六連隊（新発田）と歩兵第三十連隊（村松）があり、歩兵第二十六旅団司令部（高田）には歩兵第五十連隊（松本）と歩兵第五十八連隊（高田）が所属していた。高田には、師団司令部と歩兵第五十八連隊の他に、四つの特科隊のうち騎兵第十七連隊、野砲兵第十九連隊、輜重兵第十三大隊が駐屯していた¹⁶⁾。

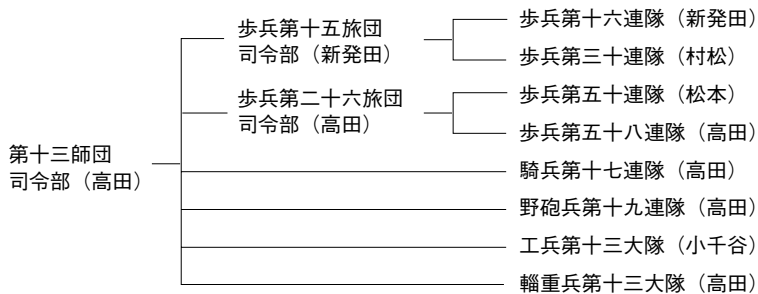


図 17 第十三師団の編成（上越市史，2004）

注 2） 鶴見は「鶴見宜信」という名であちこちに書いている。「鶴見回想」もファーストネームは「宜信」と印刷されているが、正しくは「宜信」であるので、本論では宜信をもちいている。

注 3）『偕行社記事』や『スキー』（第 1 巻号）⁴⁾は、早くから多くの研究者によって利用されていた。しかし、第十三師団謀第八四号「スキー研究ニ関スル報告送附ノ件」が発見されたのは、約 20 年程前である。松下高信（金城大学）が日本体育大学昭和 63 年度修士学位論文「日本近代スキーの発祥における陸軍の役割について—高田師団を中心に満州出動まで—」の研究中に防衛研究所図書館で見つけた。その後、筆者もその情報をもとに同所を訪れて確認した。

注 4） 木下は、その根拠として、第 1 に「実施表」によれば 2 月 11 日は紀元節、翌日の南葉山登山から考えてスキー教育がなかった、第 2 に 2 月 11 日の高田日報は募集中の高田スキー倶楽部の第一回登山会があり、これは専習将校が指導することになっていたのでスキー教育の予定はなかったことになる、第 3 に「山口回想」（前掲書 15，pp. 367－376）には、この日に競技会や講習の終了を意味する記事は掲載されていない、などを挙げている。このうち第 2 については、専習将校の講習会と同じ日に講習会が何度も開かれているので、理由として適切ではない。

注 5） 高橋がスキーを履いたのは、金井と較べて遅く同年 3 月で本格的に

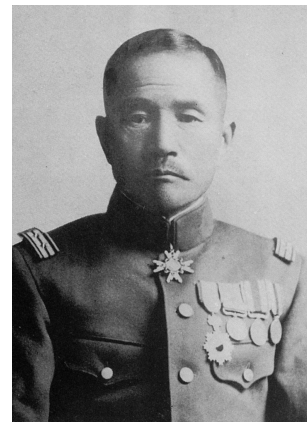


図 18 鶴見宜信
（スキー発祥
思い出アルバム，1988）

滑り始めたのは4月になってからである。高橋の回顧によれば、「4月13日にレルヒと初めて南葉山に行き15、6度も斜面を20間ほど滑れた」⁵⁹⁾という。阿部の場合はさらに遅い。

注6) 瓜生によれば、「月岡と横山が師団司令部に43年の11月二十何日かに呼び出された」(前掲書1, p.127)とあるが、「11月」では陸軍省からの通牒が来る前ということになり、そのようなことはあり得ないと考えられる。

注7) 田川によれば、28名の他に中頸城郡視学片山三男三など3名も参加していたという⁴⁹⁾。なお、この講習会の参加者名簿は、同誌の50ページにも記載され、27名の名前が掲載されている。このような参加者の差は途中から入ったり、ぬけたことによるものであろう。50ページには女教師が3名挙がっているが、田川は2名しか列挙していない。それは、大内文子(柏崎高女)が校務によって第二日目(2月16日)終了後に帰校してしまったため、翌日から急きょ藤井静子(高田高女)が参加したものであった。したがって、この講習会の女教師参加は、新発田高女の佐野サイを入れてのべ3名だが実質2名であったことになる。なお、同誌に藤井は大内の帰校の理由を病気のため(40ページ)と書いているが、それは間違いで学校の都合により帰ったのである。明治45年1月8付け高田日報に「柏崎の先生の如き学校の都合上僅々二日で要領を会得されようとした」と堀内がその熱意を褒めている。このように、出入りがあったため参加者記録に違いが生じたものと思われる。ちなみに、高田新聞は「体操科教員三十名」(明治44年2月20日付け)と報じていた。

注8) 第十三師団スキー研究委員の「日本に於ける「スキー」の経過」によれば、「約二週間」と書かれているが、実際には「新発田、村松、小千谷各隊よりスキー研究に爲来高中の各委員は十日間の練習を終り来る三日帰隊する由なり」(高田日報、明治44年2月28日付け)とあることから、実際には10日間で終了したと思われる。

注9) 『スキー発祥思い出のアルバム』⁶⁰⁾には写真番号145～152の七葉の写真がすべて3月1日となっているが、「師団報告」からみると散兵の射撃や露営の写真(148～152)の五葉は3月9日に撮影されたものである。

注10) レルヒは『明治日本の思い出』⁶¹⁾に難波山の1,200メートルまで機関銃を引っ張り上げたとしているが、南葉山(難波山)の標高は949メートルしかない。そこで『スキー発祥思い出のアルバム』では、900メートルと修正している。

1) 瓜生卓造,スキーの裏方たち(スキー,Vol.73-1,実業之日本社,1972,p.124)

2) 第十三師団スキー研究委員,「スキー」研究経過ノ概要(「スキー」術研究報告及意見,東京偕行社,1912,pp.13-21)

3) 鶴見宜信,日本に於ける当初のスキー(スキー年鑑 第5号,全日本スキー連盟,1931)

4) 第十三師団スキー研究委員,日本に於ける「スキー」の経過(スキー,第1号,越信スキー倶楽部,1912,pp.45-61)

5) 第十三師団スキー研究委員,前掲書2,p.1

6) 同上書,p.16

7) 同上書,pp.17-20

8) 鶴見宜信,前掲書3,p.62

9) 鶴見宜信,同上書3,p.66

10) 中野理,スキーの黎明,四季社,1957,p.24

11) 中野理,スキーの誕生,金剛出版,1964,p.291

12) 瓜生卓造,スキー三国志,スキージャーナル社,1970

13) 長岡忠一,日本近代スキーの発祥と展開,メディアKコスモ,1974,pp.46-47

14) 臼田明,スキー開拓者・高橋良(一)—日本のスキー功労者の発見と奇跡—(信濃 45-10,1993,pp.70-71)

15) 山崎紫峰,日本スキー発達史,朋文堂,1936,p.27

16) スキーの発祥(高田市史,高田市史編集委員会,1958,pp.45-47)

17) 瓜生卓造,スキー風土記,日貿出版社,1978,p.76

18) 酒井繁,日本のスキー発達についての一考察 I (玉川大学文学部論叢25,1984,pp.51-53)

19) 神田茂一,スキー昔ばなし(中央公論,1972,pp.230-234)

20) 神田茂一,同上書,p.231

21) 瓜生卓造,前掲書12,p.13

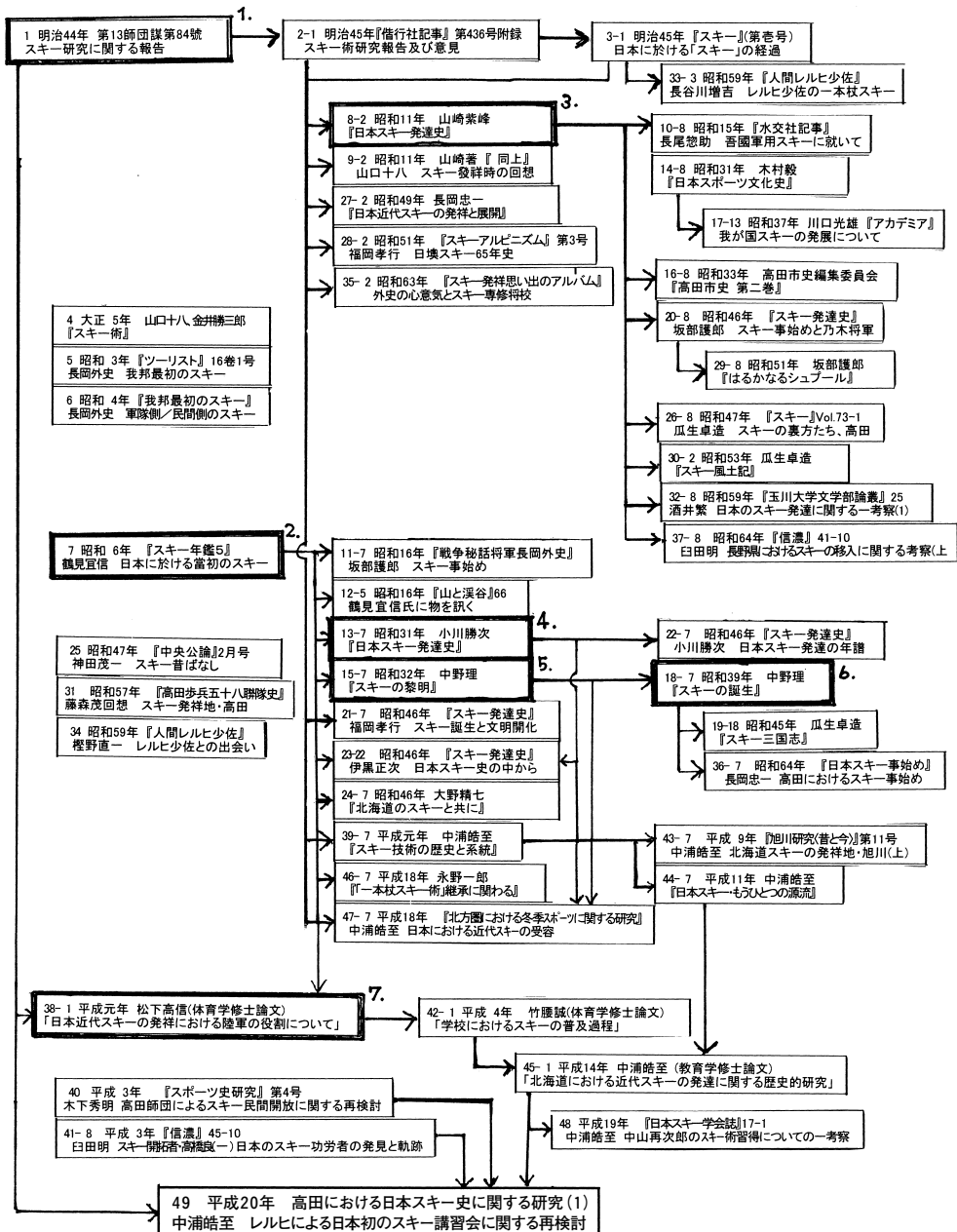
- 22) 松下高信,日本近代スキーの発祥における陸軍の役割について—高田師団を中心に満州出勤まで—(日本体育大学平成元年度修士学位論文),pp.45—47
- 23) 長岡外史,我邦最初のスキー,イデア書院,1929,p.2
- 24) スキーの講話,高田日報,明治44年1月13日
- 25) 穿櫓の實地教授 レルヒの指導,高田新聞,明治44年1月13日
- 26) 伊黒正次,日本スキー史の中から(現代スキー全集,第5巻,実業之日本社,1971,pp.356—359)
- 27) 坂路とスキー 薬師山登攀の試験,高田日報,明治44年1月15日
- 28) 樫野直一,レルヒ少佐との出会い(我が国スキーの父人間レルヒ少佐,レルヒの会,1984,pp.58—59)
- 29) スキー薬師山登攀,高田日報,明治44年1月16日
- 30) 南葉登山の壮挙,高田日報,明治44年2月4日
- 31) 山根中將の視察,高田日報,明治44年2月11日
- 32) スキー遠乗会 国境に達す,高田日報,明治44年2月23日
- 33) 小学校長とスキー,高田日報,明治44年3月3日
- 34) スキー隊米山登攀,高田日報,明治44年3月5日
- 35) 鶴見宜信氏に物を訊く(山と溪谷 第66号,1941,pp.25—26)
- 36) 長岡忠一,日本近代スキーの発祥と展開,メディアKコスモ,1974,pp.46—52
- 37) 堀内大佐とレ少佐,高田日報,明治44年1月7日
- 38) 鶴見宜信,前掲書3,pp.55—56
- 39) 吹雪を衝て スキー隊行軍,新潟新聞,明治44年1月25日
- 40) 整列せる雪滑隊,高田日報,明治44年1月25日
- 41) 団長歩隊視察,高田新聞,明治44年1月29日
- 42) 穿櫓の金谷登攀 学生は来観せよ,高田新聞,明治44年1月29日/雪滑で薬師登攀学生一般人も観覧せよ,高田日報,明治44年1月29日/本日の雪滑登山,高田日報,明治44年1月30日
- 43) 穿櫓の金谷登山,高田新聞,明治44年2月1日
- 44) 初めて乗ったスキー,高田新聞,明治44年2月6日/昨日のスキー滑走,高田日報,明治44年2月6日/スキーと教育,高田日報,明治44年2月8日
- 45) スキー行軍,新潟新聞,明治44年2月8日
- 46) スキー登山,新潟新聞,明治44年2月12日
- 47) 南葉山に向ふ,高田日報,明治44年2月13日
- 48) 穿櫓南葉踏破,高田新聞,明治44年2月14日
- 49) 田川辰一,廿五県立学校のスキー研究(スキー,第1号,越信スキー倶楽部,1912,pp.30—35)
- 50) 体操教師のスキー,高田日報,明治44年2月16日
- 51) スキー号(特集ページ),高田日報,明治44年2月20日
- 52) 長岡外史,我邦最初のスキー(ツーリスト,16—1〈通算88号〉,1928,p.53)
- 53) 第十三師団スキー研究委員,前掲書4,pp.51
- 54) 春日山登攀,高田日報,明治44年2月26日
- 55) 昨日の雪艇倶楽部,高田日報,明治44年2月27日
- 56) 雪艇富士登攀,新潟新聞,明治44年3月16日
- 57) 踏破す一萬二千尺の芙蓉峰,高田日報,明治44年4月19日/レルヒ少佐同伴の強力が直話,高田日報,明治44年4月20日
- 58) 最終の雪艇練習,高田日報,明治44年3月27日
- 59) 高橋翠郊,スキー昔話,スキー年鑑 第6号,全日本スキー連盟,1932,pp.156—160
- 60) テオドル・フォンレルヒ(中野理訳),明治日本の思い出 日本スキーの父の手記,中外書房,1970, pp.82—83
- 61) レルヒの会・上越市立総合博物館編,スキー発祥 思い出のアルバム,ベースボール・マガジン社, 1988,pp.47—49

(資料1) 高田における日本スキー発祥に関する主要な文献 (中浦皓至作・07.9.30)

	年	文 献 名	論 文 名 (章 ・ 節)	著 (編) 者 ・ 発 行 所
1	明治44年	スキー研究に関する報告	第十三師団謀第八四號 (4月10日付)	第13師団参謀長渡邊小太郎
2-1	明治45年	『信行社記事』第436号附録 (pp.1-21)	スキー術研究報告及び意見	東京信行社
3-1	同	『スキー』(第巻号)(pp.45-50)	日本に於ける「スキー」の経過	越信スキー倶楽部
4	大正 5年	『スキー術』(pp.10-11)	我國のスキー界	山口十八・金井勝三郎・大日本新聞学会出版部
5	昭和 3年	『ツーリスト』16巻1号(pp.53-69)	我邦最初のスキー	長岡外史・ジャパン・ツーリスト・ビューロー
6	昭和 4年	『我邦最初のスキー』	軍隊側のスキー／地方側のスキー	長岡外史・イデア書院
7	昭和 6年	『スキー年鑑』(pp.59-67)	日本に於ける當初のスキー	鶴見宣信・全日本スキー連盟
8-2	昭和11年	『日本スキー発達史』(pp.26-27)	第三編 スキー術発祥時代	山崎紫峰・明文堂
9-2	同	『 同 上 』(pp.367-376)	スキー発祥時の回想	山口十八
10-8	昭和15年	『水交社記事』38巻1号(pp.136-38)	吾國軍用スキーに就いて	長尾惣助・水交社
11-7	昭和16年	『山と溪谷』第66号 (pp.22-30)	鶴見 宣信氏に物を訊く	山と溪谷社
12-5	同	『戦争秘話将軍長岡外史』(pp.262-92)	スキー事始め	坂部護郎・二見書房
13-7	昭和31年	『日本スキー発達史』(pp.3-4)	明治四十四年 スキー発祥	小川勝次・明文堂
14-8	同	『日本スポーツ文化史』	スキー事始め(昭25.1読売スポーツより)	木村毅・洋々社
15-7	昭和32年	『スキーの黎明』(pp.40-50)	メトレスキー オテレスキー	中野理・四季社
16-8	昭和33年	『高田市史 第二巻』(pp.45-47)	第二節 スキーの発祥	高田市史編集委員会
17-13	昭和37年	『アカデミア』(pp.41-52)	我が国スキーの発展について	川口光雄(名古屋南山大学)
18- 7	昭和39年	『スキーの誕生』(pp.126-138)	メトレスキー(mettrezSki)オテレスキー(oterezSki)	中野理・金剛出版
19-18	昭和45年	『スキー三國志』(pp.13-17)	第一章 スキーの発祥	瓜生卓造・スキージャーナル
20-8	昭和46年	『スキー発達史』(pp.86-103)	スキー事始めと乃木将軍	坂部護郎・実業之日本社
21-7	同	『 同 上 』(pp.104-126)	スキー誕生と文明開化	福岡孝行・ 同 上
22-7	同	『 同 上 』(pp.134-155)	日本スキー発達の年譜	小川勝次・ 同 上
23-22	同	『 同 上 』(pp.356-359)	日本スキー史の中から	伊黒正次・ 同 上
24- 7	同	『北海道のスキーと共に』(p.9)	高田で初のスキー講習会	大野精七・私刊
25	昭和47年	『中央公論』2月号 (pp.230-237)	スキー昔ばなし	神田茂一・中央公論社
26- 8	同	『スキー』Vol.73-1(pp.123-124)	スキーの裏方たち、高田	瓜生卓造・実業之日本社
27- 2	昭和49年	『日本近代スキーの発祥と展開』(pp.46-52)	メトレ・スキー	長岡忠一・メディアKコスモ
28- 2	昭和51年	『スキーアルビニズム』第3号 (p.17)	日壊スキー65年史	福岡孝行・スキーアルビニズム社
29- 8	同	『はるかなるシュブール』(pp.21-31)	スキーの発祥	坂部護郎・スキージャーナル
30- 2	昭和53年	『スキー風土記』(p.76)	高田	瓜生卓造・日貿出版社
31	昭和57年	『高田歩兵五十八聯隊史』 (pp.24-25)	スキー発祥地・高田(藤森茂回想)	高田歩兵五十八聯隊史編集委員会
32- 8	昭和59年	『玉川大学文学部論叢』25 (pp.51-53)	日本のスキー発達に関する一考察(1)	酒井繁(玉川大学)
33- 3	同	『人間レルヒ少佐』(pp.38-42)	レルヒ少佐の一木杖スキー	長谷川増吉・レルヒの会
34	同	『 同 上 』(pp.58-59)	レルヒ少佐との出会い	榎野直一・レルヒの会
35- 2	昭和63年	『スキー発祥思い出のアルバム』(p.16)	外史の心意気とスキー専修将校	レルヒの会
36- 7	昭和64年	『日本スキー事始め』(pp.38-44)	高田におけるスキー事始め	長岡忠一・ベースボールマガジン社
37- 8	同	『信濃』第41巻第10号 (pp.787-788)	長野県におけるスキーの移入に関する考察(上)	臼田明
38- 1	平成元年	『日本近代スキーの発祥における陸軍の役割について』(体育学修士論文)		松下高信(日本体育大学大学院)
39- 7	同	『スキー技術の歴史と系統』(p.13)	第三節 日本のスキー術	中浦皓至・北大図書刊行会
40	平成 3年	『スポーツ史研究』第4号(pp.15-32)	高田師団によるスキー民間開放に関する再検討	木下秀明(日本大学)
41- 8	同	『信濃』第45巻第10号 (pp.70-71)	スキー開拓者・高橋良(一)日本のスキー功労者の発見と軌跡	臼田明
42- 1	平成 4年	『学校におけるスキーの普及過程』(体育学修士論文)		竹腰誠(日本体育大学大学院)
43- 7	平成 9年	『旭川研究(昔と今)』第11号 (pp.2-3)	北海道スキーの発祥地・旭川(上)	中浦皓至・旭川市史編集課
44- 7	平成11年	『日本スキー—もうひとつの源流』(pp.36-38)	第一節 高田のレルヒ	中浦皓至・北大図書刊行会
45- 1	平成14年	『北海道における近代スキーの発達に関する歴史的研究』(教育学修士論文)		中浦皓至(北大大学院)
46- 7	平成18年	『一本杖スキー術』継承に関わる』(p.51)	第三章 長岡外史師団長胸像の設置	永野一郎・私刊
47- 7	同	『北方圏における冬季スポーツに関する研究』(pp.3-29) 第一章 日本における近代スキーの受容		中浦皓至(北大大学院)
48	平成19年	『日本スキー学会誌』17-1(pp.79-90)	中山再次郎のスキー術習得についての一考察	中浦皓至(北大大学院)

注1) 資料番号欄のハイフンの右数字は主な引用文献、注2) 同番号1、7が主な原典、注3) 同番号8、13、15、18からの引用が多い

(資料2) 高田のスキー発祥に関する文献引用系統図 (中浦皓至作・07.9.30)



一月十五日以來スキ一傳習ノ状況左ノ如シ

[illegible]

(資料4) 鶴見宜信の「日本に於ける當初のスキー」(『スキー年鑑5』1931)

日本に於ける當初のスキー

鶴見 宜信

スキーの歴史は頗る古いもので、ツングース民族が中央亞細亞から漸次北の方へ移入して行つたものだとの説もあるが、此の時代のもものは現今のスキーとは形狀が異り、恐らく櫟類のものであつたことは容易に思考する事が出来る。

諾威とスキー

一八七〇年頃に初めて諾威で冬の遊技として用ゐらるゝ様になり、次第に改良されて今日のスキーとなつたので何んと言つても諾威が本場である。中部歐羅巴に用ゐられたのは今から三十五年ばかり前でウイナ郊外に居住してゐたヅタルスキーと云ふ人によつて鼓吹せられたのである。同氏はアルペンスキーの創設者であつて、諾威式のものではアルプス

山地方の高連山には適當しないと云ふので、六年もかゝつて研究工夫し其間二百有餘の縮具を作り、最後にリリンフェルト縮具を以て奧國式のスキー術を案出し、諾威の復杖を改良して一本の頑丈なるステッキとなし、茲に初めて、完全に高連峯を跋涉し得るに至らしたのである。

本邦に渡來

此如してスキーが中歐地方に流入して後十五年、即ち明治四十四年の一月に、奥國陸軍參謀少佐テオドル・エドレル・フォン・レルヒ氏によりて初めて日本に傳へられた。予は當時高田の歩兵第五十八聯隊に中隊長として在勤し、レルヒ少佐がスキー術を我が日本の將校に初めて教授せらるゝの時、師團